屑鉄機械劇場

椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屑鉄機械劇場

【Ｎコード】
Ｎ２９０６Ｚ

【作者名】
椿

【あらすじ】
ナチュラルとコーディネイターが争う時代。世界は殺意と憎悪に満たされていた。そんな中、一人の少年が戦乱の渦に巻き込まれていく。ＣＥ．７０。人類史上、最低の戦争はまだ始まったばかりだった。

プロローグ（前書き）

どうも、椿です。ガンダムＳＥＥＤの二次創作をさせていただきます。色々と物議を醸した原作ですが、敬意を持って書いていきたいと思います。

いくつか注意がありまして、一読をお願いします。長いと思ったら跳ばしてもらっても構いません。

?この小説に転生やハーレム、アンチといったものはありません。チートに関しては個人の感性なのでなんとも言えないです。

?作者の不勉強と、原作の設定が若干曖昧なため、資料などと食い違う描写があるかもしれません。意図的に変えてあることもあります。

例えば、原作ではビーム同士は干渉せず、ビームサーベルでのつばぜり合いはできませんが、この作品ではできます。かっこいいからです。それと血のバレンタイン関係などちょこちょこ手を加えてあります。ご了承ください。

?この小説は携帯で書いています。読みやすくなるよう努力はしていますが、それは携帯での話なので読み難い方にはあらかじめ謝罪をさせていただきます。

プロローグ

宇宙は暗かった。

人は地球から離れても争いをやめず、地球とコロニー。ナチュラルとコーディネーターに別れて戦火を広げている。人種の違いは国同士の殺し合いに発展し、ナチュラルは地球連合、コーディネーターはザフトという組織を創った。

遺伝子に手を加えたコーディネーターは数で劣るものの、能力で上回り、さらには巨大な人型機動兵器を用いて圧倒的な物量を誇る連合と渡り合っている。

「……」

宇宙船の艦内で少年――シルヴァ・ウィンチェスターは外を眺めていた。碧眼で黒い髪という珍しい組合せは目立つが、彼自身が発している陰気なオーラは人を近寄らせない。

機内食にも手を付けず、ゼリーのパックを手に持っていた。

彼が乗っている宇宙船は中立として有名なオーブ連合首長国が有する物で、宇宙ステーション＜アメノミハシラ＞へ向かう便だった。

＜アメノミハシラ＞は軌道エレベーターとして建造されていたのだが、地球とプラントの戦争の煽りを受けて軍事用宇宙ステーションへと姿を変える事となった。シルヴァもその関係者として召集されたのである。

ＣＥ，７０。人類史上最も愚かな戦争は、まだ始まったばかりだっ

た。

プロローグ（後書き）

作中でのセリフ、単語の意味がわからない場合、遠慮せずに質問してください。ストーリーの進行に問題ない限りは喜んでお答えします。

登場人物やＭＳ、戦艦の設定は後からまとめて公開しようかと思います。

1―1

シルヴァは宇宙港で立ち尽くしていた。つい三日前まで地球にいた彼は、オーブの技術者である父の命令でここに来た。仕様変更される＜アメノミハシラ＞の改修作業を手伝えということらしい。

迎えの人間が来る予定なのでこうして待っているのだが、一向に来ない。適当にうろついて迷子になるのも嫌だったため、ただボンヤリと立っていた。

（それにしても……）

近くのベンチへと歩きながら、シルヴァは思った。場所が場所なので当たり前だが、人がやたらと多い。彼は人数の多い所を嫌っていた。学校に行くのも億劫だったので、小規模な軍事会社で働いていた。１５歳なのにだ。

そのため一応は技術者の端くれということになる。機械を弄るのが好きなのだ。唯一の趣味と言ってもいい。

手持ちぶさたに周りを見渡す。輸送船に目が止まった。いや、正確にはそれに積まれるであろう荷物だ。

やけに大きい。遠目でよくわからないが１０Ｍ以上は確実にある。なにやら嫌な予感がした。

（まさか、ＭＳ……？）

ＭＳ（モビルスーツ）とはプラントが開発した人型機動兵器のことだ。一年前に実戦

投入され、数で劣るプラント側に勝利をもたらした。

全高は２０Ｍにも渡り、大型の火器を扱うことができる。地上での性能は不明だが、現代戦では最強の兵器といってもいい。

そんな物が何故、こんな所にあるのか。最も、ここは軍事宇宙ステーションとなる予定なので兵器が運びこまれること自体は不思議ではないのだが。

「……」

輸送船に運ばれているのはおかしい。防衛用なら分かるが、なぜ外に出すのかが分からない。

そこまで考えてシルヴァは思考を中断した。興味がそこで尽きたからだ。どうでもよかった。

視線を人ごみに戻す。いい加減うんざりしてきた。心なしか気分も悪い。

そんなことを考えていると、またもや何かが目についた。携帯端末を持ってうろうろしている———少女だ。非常に目立つ長い銀髪を揺らしてしきりに目を動かしている。

少女の顔がこちらを向く。目が合った。キリッとした目つきが特徴的な美少女だ。一度携帯端末に視線を移し、のしのしとやってくる。遠目からでも怒っているのがわかった。

少女はシルヴァの目の前で立ち止まると、もう一度携帯端末を確認

し、

「シルヴァ・ウィンチェスターだな？」

そう尋ねてきた。

「いや、違いますけど」

「そうか、すまない」

シルヴァの嘘をばか正直に信じ、去っていった。

十分後。

「騙したな！」

再び少女がやってくる。今度は激怒していた。若干息があがっているところをみると、走り回っていたらしい。シルヴァは感心しながら悪いことをしたなと思った。

「まったく、事務局に問い合わせたんだぞ！」

「すまなかった」

抑揚の無い声で謝罪する。少女は小さくため息を吐いて、

「もういい。それより早くついてこい。時間がないんだ」

そう言ってノシノシと歩いて行った。付いていかないといい加減に彼女がキレそうだったので、シルヴァもバックを持って彼女の後を追った。

◇◇◇◇◇

見失わないように彼女の後ろを歩く。きびきびとした歩き方は軍人のようだ。先ほどの輸送船の件もあり、シルヴァの中にあった嫌な予感が現実味を帯びてくる。

「どこに向かっているんだ？」

シルヴァが尋ねると、少女は少しだけ顔をこちらに向けた。

「私達の船だ。当たり前だろう」

おや？

シルヴァの頭がフリーズする。自分がここに来た理由は＜アメノミハシラ＞の改装工事をすることだったはずだ。しかし目の前の少女は船に向かっていると言う。これはどういうことだろうか？

（……いや、まて）

別に乗組員になれというわけではないかもしれない。もしかしたら改修作業に使う船の整備をしろということなのでは———

「降りてまたすぐ乗ることになる。だが安心していい。一週間程度、そこら辺をぶらつくだけだ」

少女の淡々とした説明でシルヴァの希望は打ち砕かれた。だが、彼はまだ諦めない。

「別人だろう？　俺は技術者として―――」

「シルヴァ・ウィンチェスター。１５歳、出身はプラントの……ユニウスセブン。父はモルゲンレーテ社の幹部。幼少時、プラントからオーブに移住。学校には行っておらず父親の伝手で＜ＧＲＡブランティッド社＞に勤務……どうだ？」

ユニウスセブンと母のくだりで表情が曇り、後半の部分で苛ついたらしい少女がシルヴァの素性を洗いざらい喋る。

今度こそシルヴァは観念し、頷く。凄まじい勢いでやる気が無くなっていくのを感じた。

「そういえば、自己紹介がまだだったな」

どうにか逃げ出せないものかと考えていると、少女が口を開く。

「クレア・レイエット。お前と同じ１５歳で階級は准尉。ナチュラルだ。よろしく頼む」

「ああ。よろしく」

そう言ってから再びおや？　と思う。彼女はなんと言った？

「え？　准尉？　軍人さん？」

「そうだぞ。なんだ？」

頭に疑問符を浮かべるクレアを無視して、今までの情報を整理する。

・自分はアメノミハシラの改修作業を手伝いに来た。

・港でＭＳらしき物を積み込む輸送船を見た。・ボンヤリしていたら美少女に声をかけられた。

・その少女に素性が全てばれていた。

・その少女はクレアといって自分と同い年だった。

「……」

ここまではいい。あいにくと恋愛事に興味は無いが、大抵の男は喜ぶシチュエーションのはずだ。

しかし、

・クレアは軍人で准尉さん。彼女と同じ船に乗るらしい。

この事実だけが問題だった。

「ほら、あの船だ」

黙りこんだシルヴァを訝しげに見ていたクレアがそう言って指を差す。

暗い顔を上げると、一隻の船があった。薄い青色で、全長はおそらく１５０Ｍほど。

「……」

先ほど見た輸送船だった。

1―2

「……」

シルヴァとクレアは船内の廊下を歩いていた。

「つまり我々の部隊はこれから先、戦場の主役になるだろうＭＳの運用データの収集と―――」

ブリッジに行くまで仕事内容をクレアは熱心に説明してくれているが、シルヴァの表情は暗い。彼は宇宙が嫌いだった。

「そこで私とお前はザフト製ＭＳのテストパイロットに選ばれたのだが……どうした？」

「嫌いなんだよ。……宇宙」

「？　気分が悪いのか？」

「いや……」

シルヴァはそう言って外を見る。あと少しすればまた宇宙の旅が始まるだろう。そう思うと気が重かった。

またも様子のおかしいシルヴァにクレアは首を傾げるも、特に詮索しなかった。あったばかりの人間にあれこれ聞かれるのも嫌だろうと思ったのだ。

その後は特に会話も無く、ブリッジに着く。船全体の大きさと比べ

るとやや狭い印象を受けた。ブリッジ要員も少なく、四人しかいない。オペレーターの一人、シルヴァやクレアと同年代の娘がこちら――というよりクレアの方へ手を振っている。

クレアが敬礼しようとすると、初老の男性が手で制止する。

「ここは半分軍隊ではないと言っただろう？　従って規律もモラルに問題が無い限り強制はしない」

「しかし……」

抵抗があるらしいクレアを尻目に、艦長はシルヴァへ右手を差し出した。

「まあ、ここまで固くならんでもいいが、最低限の事は守ってもらうぞ？　シルヴァ・ウィンチェスター」

「はあ……」

「デューク・デクスターだ。短い間だがよろしく頼む」

握手を交わしながらシルヴァは眉を寄せた。値踏みされているような感じがする。

「ここはいいから格納庫の方へ行ってくれ。私達よりメカニックの連中の方が君達と顔を合わせるはずだ」

またも敬礼を止められて不服そうなクレアを連れて、シルヴァはブリッジを後にした。

「……どういう扱いなんだ？　ここ」

尋ねると、クレアは答え難そうに唸ってから、

「中立を宣言しているオーブが横流しされたＭＳを使用しているなどと知れたら、その……事だろう？」

「ああ……」

だからこその輸送船。短期間なのもそれが理由なのだろう。これは有益な情報だ。

「で、出発の予定時刻は？」

「荷物の積み込みと固定が終わり次第だ。ＭＳのパーツが予想より多くてな、少し遅れるらしい……って、これでは私がお前の秘書みたいじゃないかっ！」

端末を操作しながらクレアが答える。つまり自分は訓練に使用される機材に関わるかもしれない。運がよければＭＳにも触れるだろう。宇宙は嫌だが、そう考えれば気も軽くなった。

それから少し歩き、船体の後部に位置する格納庫に到着する。

「おぉ……」

輸送船というだけあって広い。多数のコンテナが積まれており、大勢の作業員が積み荷の確認と移動に忙しく動いている。

作業用の機械と怒鳴り声が響いているが、シルヴァは全く気にしな

かった。彼の視線は一点を見つめている。

白い体躯。トサカのように見える頭部。肩部にはブレード状の突起が付いている。四肢は細いが、機械特有の力強さを感じさせた。

「＜シグー＞か」

＜ＺＧＭＦ－５１５　シグー＞。現在、最も普及している＜ＺＧＭＦ－１０１７　ジン＞の後継機にあたる機体で、スラスター周りを強化し、宇宙空間での性能を重視している。しかし、生産数はそれほど多くはなく、搭乗者の多くは指揮官……というのがシルヴァの知識だ。

「いいだろう？　私の機体だ」

自慢するようにクレアが胸を張る。

「お前ナチュラルだろ」

ＭＳに使われているＯＳは複雑で、コーディネーターにしか扱えないはずだった。クレアの表情はさらに自慢気なものとなり、

「努力したんだ。コーディネーターとナチュラルに、大した差など無い。慢心と嫉妬がお互いの能力を殺しているだけだ」

「……」

そんな簡単な問題だっただろうか……？　シルヴァはなんとも言えない表情になった。

しかし彼女がここに配属されたのがなによりの証拠である。

テンション差が激しい二人の元に中年男性が走り寄って来た。

「ロブさん！」

クレアが笑顔になる。知り合いらしい。ロブと呼ばれた男は作業着姿で、ファイルを脇に抱えている。「敬礼と親愛のハグはいるかい？」

「いや、いい」

セクハラだった。クレアは二歩ほど下がり、笑顔で拒否する。ドン引きしていた。それに傷つくわけでもなくロブはシルヴァを見て、快活な笑みを浮かべる。

こういうノリは苦手だが、恐らく世話になるだろう。シルヴァはそう考え、不慣れな挨拶を試みた。

「どうも――――」

「この陰気そうなガキがテストパイロットかい？」

「ああ」

シルヴァの言葉を遮り、クレアに尋ねる。クレアもこくりと頷いた。

「いやぁ、悪い悪い。ロブ・ジャイルズだ。階級は曹長でここのメカニックチーフを――――どうした？」

硬直しているシルヴァに二人は目を丸くしている。

「え……？　テストパイロット？　技術員とかじゃなくて？」

「さっき説明しただろう。聞いていなかったのか？」

憮然とした表情でクレアが言う。ロブは状況が飲み込めていない様子だ。

「な、なんのテストパイロット？」

あそこにある＜シグー＞だろうか。クレアと共用なのかもしれない。それならば彼女に全てを押しつけて自分は技術者として確固たる地位を――――

「ん、お前の乗機は＜ジン＞だぞ？」

クレアの言葉によってシルヴァの現実逃避は阻まれた。

「……」

「どうした？」

沈黙するシルヴァに空気を読まないクレアが尋ねる。ロブはそろりと逃げ出した。

「なんでテストパイロットに選ばれる？　俺はただの一般人だ」

「う……。そんなこと、私が知るわけがないだろう」

シルヴァの避難するような目に怯むも、クレアは毅然として言った。

「くっそ……！」

シルヴァの中で憤りが大きくなっていく。騙されたのだ。これを仕組んだのもあの父親だろう。子供を振り回すことに抵抗が無いのだ。

「言っとくが、俺はＭＳを動かしたことなんてないからな。シミュレーターを１２時間やっただけだ」

シルヴァは忌々しげにそう言って、その場を後にした。

1―3

いつも通りの陰気な顔で、シルヴァはキーボードを叩いていた。

シルヴァの搭乗機となる予定だった＜ＺＧＭＦ－１０１７　ジン＞の機内である。プラント（ザフト）が初めてＭＳを兵器として投入したのがこの＜ジン＞であり、生産数も最も多い。

しかしながら、いくら最強の機動兵器であっても性能を十分に発揮できるのは整備が行き届いている場合だ。シルヴァはキーボードをしまい、パネルの電源をオフにする。開けっ放しだった機体のコックピットから降りた。

「どうだい？」

メカニックチーフのロブ・ジャイルズ曹長が声を掛けてくる。シルヴァはため息を吐いた。

「動くことには動くが……まだ鈍いな。誤差がある」

「許容範囲じゃ……」

「ないな」

シルヴァにバッサリと切り捨てられ、今度はジャイルズがため息を吐いた。二人揃って機体の方を見る。

「完成までどれくらいかかる？」

「あと三日。徹夜したら二日」

ジャイルズが肩を落とす。二人が乗っている輸送船＜ブーゲンビリア＞にはニ機のＭＳが配備される予定だった。＜ジン＞と＜シグー＞である。

宇宙で使用できるＭＳはこの二種類のみなのだ。他の機種もあるが、いずれも地上用だったり水中用だったりで宇宙では使い物にならない。＜ブーゲンビリア＞に運びこまれたＭＳはパーツ単位だったらしく、＜シグー＞を完成させるのが精一杯で、＜ジン＞は組み立てるのが比較的容易だと思われていたため後回しにされたらしい。

「少し寝るから。後はよろしく」

シルヴァはそう言って格納庫の出口に向かう。出港してから一日。彼が父親に騙され、この船に乗せられたのは昨日の出来事だった。

文句を言いながらもＭＳの組み立てに付き合い、逐一しなければならない動作テストを一晩中（時間的に）やっていた。宇宙に上がってきたばかりなのもあって、これ以上ない程に疲れていた。

「むぅ……」

暗い自室でクレアは目を覚ました。昨日はあれからシルヴァがデューク艦長に直談判し、論破されていた。一応正式にオーブ軍へと入れられたらしく、階級は曹長とのことだ。

そのことにシルヴァは激しく反発し、艦長に父親と会わせろと喚いていた。

今回の任務でやる事と言えば、ＭＳの機動テストをやって訓練用のペイント弾を射ち合うだけである。よほど重大な事故でも起きない限り、死ぬ心配はない。

そのためクレアには何故彼がそこまで拒むのか分からず、同僚の少年に若干の失望を抱いていた。

ノロノロと着替え、部屋を出た。ぼんやりとした頭のまま格納庫へ向かう。運び込まれたばかりの＜シグー＞の調子を見たいし、＜ジン＞の問題で変更されたテストの日程も確認しなければならない。

居住区の廊下を歩きながら、あの後シルヴァはどうしたのだろうかと心配になった。ブリッジに向かうところまで同行したのだが、いい加減に呆れてしまい、見捨てるように格納庫へ逃げてしまった。

考えてみれば、あれはよくなかったかもしれない。状況があまりにも速く動きすぎたせいでシルヴァも混乱していたのだろう。

シルヴァの部屋の前で立ち止まる。声を掛けようと思うも、なんと言っていいか分からない。諦めろ？　なにかあったら力になる？

どちらも正解とは思えない。仮に言ったとしても、お前には関係ないと返されるのがオチだろう。

「むぅ……」

しばらく迷った後、クレアはそのまま格納庫へ向かった。

「おお……」

クレアは感心していた。乱雑していた格納庫は綺麗に整頓されている。

昨日はＭＳ用の部品と武器弾薬、食料やその他の荷物がごちゃ混ぜになっており、とても見れたものではなかったのだ。

ジャイルズの話によると、シルヴァが＜シグー＞を操ってコンテナを動かしたらしい。その件についてはクレアも手伝うと申し出たのだが断られ、渋々部屋に戻ったのだ。

「酷かったな、ありゃ。なにがどこにあるかわからなかった」

「だから手伝うと言った」

「あの状況で変に構うと余計わからなくなるんでね。申し訳ありませんクレア准尉」

「くっ……。馬鹿にして」

「ここはいいから朝飯食ってきな」ジャイルズにそう促され、クレアは渋々食堂へ向かった。

◇◇◇◇◇

「やっぱり背中のバインダーがなぁ」

ジャイルズがぼやく。シルヴァは寝癖のついた頭のままパネルを見つめていた。

「こっちは終わった。あとはくっつけるだけなんだが……」

シルヴァが＜ジン＞の座席に座りながら言う。制御系のチェックは終わったため、あとは四肢をくっつければいい。最も、パーツをバラバラで集めてきたため、入念な動作テストを行わなければならないが。

「分かってるよ。まったく……」

ジャイルズが頭を掻きながら悪態をついた。＜ジン＞は殆ど完成していると言っていい。しかし、動かしてみると応答性が悪かったりすることが多く、そのたびに確認しなければならないのだ。技術班の頑張りと（一時的に）作業がトントン拍子に進んだ反面、終了間際に頻発する問題は大きなストレスとなっている。

作業が始まって丸二日経つのもあり、メカニックの人間も疲労の色が濃い。

唸るジャイルズの元へクレアがやってくる。

「休憩だそうだ」

「後少しなんだが……」

クレアは呆れたようにため息を吐く。

「目に見えて作業スピードが落ちている。重大なミスを起こす前に寝ろ……艦長がそう言っていた」

そう言ってクレアは＜ジン＞を見上げる。今は右脚部と左腕部が外

されている他、細かい装甲が無いためみすぼらしかった。鎧のようなシルエットを持つ＜ジン＞なだけに、落武者のように見える。

「分かったよ。だが背中のバインダーだけはやらせてくれ。もう少しなんだ……頼む」

懇願するようなジャイルズの声に、クレアはたじろぐ。自分の倍以上生きている相手からこんなことを言われては断り難い。

「り、了解した。艦長に言っておく」

ぎこちない仕草でそう言って、ブリッジへ向かった。

「どうした？」

＜ジン＞のコックピットから降りてきたシルヴァがそう尋ねると、ジャイルズはふっ、と笑い、

「ちょろいな……」

そう呟いた。

1―4

「むっ……」

ＭＳの整備をしようと格納庫へと来たクレアは眉を寄せた。人の気配がする。

艦長の指示でＭＳ関係の作業を一時的にストップし、メカニック達を休ませているため、輸送船＜ブーゲンビリア＞の船内は酷く静かだ。微妙な時間に睡眠をとってしまったクレアはすることもなく、ただぶらついていた。

そんな彼女の視線の先には一機のＭＳが佇んでいる。重厚で鎧のような装甲を纏い、頭部の鶏冠が特徴的な機体＜ジン＞だ。

翼に似た形のバインダーと両脚部、左腕部が外され、近くに装甲が外された状態で固定されている。そんな＜ジン＞の開きっぱなしだったコックピットハッチから一人の少年が出てくる。

シルヴァ・ウィンチェスター。黒い髪と少し暗い蒼色の瞳が特徴的な、クレアと同い年の少年だった。彼もこちらに気づいて顔をしかめる。

「……」

両者無言のまま、膠着状態が続く。しびれを切らしたクレアが口を開く。

「……なんだ？」

「こちらの台詞だ。なんのようだ？」

無礼としか言えないシルヴァの物言いに、クレアの頭がカッと熱くなる。なんなんだこいつは。あれだけ気を遣ったのに。というか私は上官だぞ。様々な言葉が脳裏に浮かぶも、全て飲み込み、ため息に変える。

「降りて来い。話をしよう」

１５歳の少女は精一杯大人ぶり、コミュニケーション能力に問題があるとしか思えない相手にそう言った。

◇◇◇◇◇

（どういうつもりだ……？）

クレアからの提案を、シルヴァは訝しく思いながらも受け入れた。てっきり昨日の一件で見放されたと思っていたのに。あの年頃の女とは人を表面でしか判断出来ない生き物だと思っていた。

ＭＳから降りるとクレアは近くにあったベンチに座る。無言だったが隣に来いということなのだろう。若干警戒しながら腰を降ろす。

「昨日はすまなかった」

少し間を置いてクレアがそう切り出す。シルヴァは眉間を歪めた。気に障ったからではなく、意味がわからなかったのだ。

「……」

「混乱しているお前を置いていってしまった。上官として、人間として、恥ずべき行為だ」

シルヴァはたじろぐ。なんなんだこの女は。そう思った。

「いや、あの……あれはだな……」

「なんだ？」

軍に入れられるのは嫌だ。正直反吐が出る。それにしても、あそこで騒いでなにかが解決するわけがない。それでも艦長に食って掛かったのは、やはり若かったからだろう。

どうして自分がそんな危険極まりない職業に就かなければならないのか。色々あってうんざりしていた社会から離れ、やっと手に入れた平穏を奪われた。憤るのも当たり前である。

それでもやはり、あの時のことを思い返すと他になにか方法がなかっただろうかと思う。自分でもみっともないことは自覚しているのだ。

つまりこの状況は非常に気まずい。失望しきった目で見られた方が気も楽である。コーディネーターというだけで無駄な期待を押しつけられるのはうんざりだ。

しかし、こうもストレートに謝罪されると、どう反応していいか分からない。

「いや、謝らなくていいです。こちらも悪いんで。すいませんでした」

早口でそう返すと、今度はクレアが怪訝な表情になった。

「口調が変だぞ？」

シルヴァは目を逸らす。なんて扱い難い女なんだ。そう思っても口には出さない。たまらず席を立とうとするも、袖を掴まれる。

「変な時間に寝たせいで眠くないんだ。だから……」

「暇だと？」

少し頬を赤くしてクレアが頷く。同年代の少年が美少女にそう言われれば心踊らせただろうが、あいにくとその辺の感性が腐り落ちたシルヴァは表情を変えることなく、ベンチに座った。

◇◇◇◇◇

シルヴァが喋らないので必然的にクレアが話し手になっていた。自分の過去、オーブの軍人の家に生まれたこと。母が他界した後、父も追うようにして亡くなったこと。

「父の意志を継ごうと思ってな。連合とプラントが広げた戦火はオーブも巻き込むかもしれない。いざというとき、祖国を守れるようになりたかった」

「それでＭＳのパイロットに？」

ストローからドリンクを啜りながらシルヴァが尋ねる。

「ああ。現状、最強の戦力だからな。……支援してくれる人もいた。ロンド・ミナ・サハク様だ」

クレアをこの部隊に配属したのも彼女だ。オーブを裏から支えている人物である。

「ナチュラルだとか、コーディネーターだとか……こう言ってはなんだが、くだらない」

そうクレアは言った。きっぱりとだ。ユニウスセブンに対する核攻撃も、その直後に行われたＮＪ投下も、クレアからすれば醜いとしか言い様がなかった。

”ファーストコーディネーター”ジョージ・グレンの話によれば、彼を創った人間は人の可能性を広げたいと言ったそうだ。しかし今ではナチュラルはコーディネーターに嫉妬し、努力よりも”何か”を優先してしまっている。

コーディネーターはナチュラルを見下し、自らの能力に酔っている者までいる。

皮肉なことに、両者とも可能性などという言葉から等しく遠いところにいるのだ。クレアにはそれがたまらない。

「だから私はＭＳのパイロットになったんだ。コーディネーターにしか動かせない物をナチュラルの私が動かして見せれば、”可能性”とやらを証明できるだろう？」

そう言ってから苦笑する。我ながら理想論が過ぎると思った。話を黙って聞いていたシルヴァは＜シグー＞の方を向き、

「だが……並大抵の事じゃないだろう？　あれを動かすのは」

「……まぁ、努力はしたな、人一倍」

一日の半分以上をシミュレーターの中で過ごしたこともある。辛かったし、これを軽々と扱えるコーディネーターを妬みもした。実際、シミュレーターを数時間やっただけで同じところにいるシルヴァに対して思うところもある。

だが、そういうものを乗り越えてこそ、何かを掴みとれるのではないか？　クレアはそう思わずにはいられなかった。コーディネーターが造ったＭＳを自由に動かせた時、確かに何かを見たのだ。それはきっと、ジョージ・グレンが木星に旅立つ前に明かした事実――その中にある、彼が本当に伝えたかったことなのだろう。クレアはそう考えている。

熱く語って渇いた喉を潤す。隣のシルヴァは酷く悲しそうな顔をしていた。

◇◇◇◇◇

可能性――――美しい言葉だが、シルヴァにとってこれほど苦々しい言葉は無い。確かにクレアは何かを掴んだのだろう。だから彼女はこの船でパイロットをやっている。それは素晴らしいことだ。だが、

評価される、認められること自体が幸運なのではないか。

「どうした？」

ストローをくわえながらクレアが聞いてくる。不思議なことだとシルヴァは思った。自分は今、確かにこの少女を妬んでいる。ナチュラルとコーディネーターという立場が逆転しているのだ。そう考えたら、口が勝手に動いていた。

「俺は……ユニウスセブンで生まれた。母さんは俺が生まれてすぐにＳ２インフルエンザで死んだ。タッチの差だったらしい」

「そ、そうか……」

クレアの表情が曇る。罪悪感を覚えるが気にならなかった。

「五歳の頃まで宇宙にいたんだが……色々あってな、居心地が悪くなって地球に降りてきたんだ」

自分の表情が暗くなっていくのがわかる。宇宙には消したい過去しかない。”色々”の部分こそ、最も重要なのだがクレアに打ち明ける勇気は無かった。

「オーブに移り住んでからも、他人と接するのが嫌だったんだ。だから学校にも通わなくなって……父の伝手で小さな兵器製造会社に勤めて……機械が好きだった。喋らないからな」

暗いユーモアを感じ、自嘲の笑みを浮かべる。そんな彼にクレアがおずおずと尋ねた。

「お前は……どうしてそんなに人を嫌う？」

「……嫌いなんじゃない。多分、怖いんだ」

「怖い？」

「２月１４日。”血のバレンタイン”があった」

開戦直後―――ちょうど半年ほど前にあった事件だ。クレアも沈痛な面持ちで頷く。

「その後にあった”エイプリルフールクライシス”。あの時もだ……」

核攻撃を恐れたプラントはニュートロンジャマーと呼ばれる兵器を投下。これは核分裂を抑制する装置であり、地球の原子力発電所はストップ。膨大な餓死者や凍死者、合わせて１０億人を出したのだ。

酷い時期だった。

「ああやって人は簡単に理性を捨てられる。感情のままに動ける……そう考えると、怖い」

「……だから、私達は強くなろうとするんだ」

クレアがそう言うと、シルヴァはキッと彼女を睨む。

「そんな”強さ”は誰だって手に入れられる。人を殺すにしたって相手が要るんだ。殺しに酔った人間は殺すものがいなくなって最後に自分を殺す」

まくし立て、シルヴァは立ち上がる。”可能性”を説いた少女が武

器を持つなど。そう考えたら口が勝手に動いてしまう。

「……」

クレアは驚きに目を見開いていた。それを見て、頭の中の冷静な部分がやめろと叫ぶ。それでも止められなかった。

「そんな強さ、俺は認めない……！」

感情を露にすると、嫌な気分になる。シルヴァはクレアに謝ってから、格納庫を後にした。鼓動の音に似た、酷い耳鳴りがする。宇宙の”音”だ。シルヴァの表情が苦痛に歪む。

（だから宇宙は嫌いだ。うるさいから……っ）

廊下の壁を叩く。手が痛くなるだけだが、気持ちが少し楽になった。

1―5

「また喧嘩したんだって？」

ハッチの外から作業服姿のロブ・ジャイルズ曹長が訊いてくる。同じく作業服姿のシルヴァは＜ジン＞のシートに座り、ＯＳを弄っていた。

「だからなんだ？」

憮然とした表情で応える。自らの考えを嬉々として語る彼女に嫌な思いをさせてしまったことを忍びなく思っているのだ。それを中年のおやじに面白がられてはたまったものではなかった。

「まったく……。青春だねぇ」

などとのたまうジャイルズをギロリと睨み、シルヴァは手元のレバーを動かした。＜ジン＞がわずかに動き、ジャイルズが慌ててハッチに掴まる。

「ば、馬鹿野郎！　あぶねぇだろうが！」

「分かったらあまりからかうな。操縦ミスで整備士の”誰か”を踏み潰すとも限らん」

ジャイルズの頬が引きつる。悪い冗談だった。最も、ここは宇宙なのでＭＳのハッチから落ちたとしても怪我をすることはない。空中をプカプカ浮いて笑い者になった挙げ句、懸命な救出作業が展開されるだけだ。

シルヴァはため息を吐いてから、右のモニターに目を移す。

「バインダーの調子はいいんだろう？」

ころりと態度を変えた彼をジャイルズは一睨みし、手に持っていた端末を見る。

「ああ、まぁな。多分飛ばそうと思えば飛ばせると思う……んだが」

ジャイルズの表情が曇る。この＜ジン＞、ＯＳに手が加えられていたのだ。いや、そんな上等な物ではない。ハッキリ言ってめちゃくちゃだった。

恐らくはＭＳのデータを取るためにいじくり回したのだろうが、荒らされていたと言った方が正しい有様だった。

「まったく……オーブ軍ってのは、こんな組織なのか？」

シルヴァの問いには嫌味が籠もっている。しかしそれも無理はなかった。スクラップ寸前のＭＳ。出港直前の騒ぎ。ぐちゃぐちゃのＯＳ。シルヴァ自身、騙されてここにいる。

「いや、んなわけないだろ……って言いたいんだけどな」

ジャイルズも疑問に思っていた。今回の任務はあまりにもミスが多過ぎる。積み込み時に色々と不手際があったらしく、その時点で予定通りにならないことなど分かっていたのだ。

無理やり予定通りにしたせいで、日が進むと同時に終了予定日も更新される。予定は一週間だったのに今は目標地点の周囲をうろつい

ているだけ。<ジン>待ちの状態なのだ。

従って、整備班も重圧を感じるようになる。その結果が昨日の我慢大会だ。メカニックチーフであるジャイルズの顔も暗くなる。

「ま、やっと見通しが立ってきたんだから喜んでいいのかね」

<ジン>のメンテナンスも最終段階に入っている。完成まであと少しだ。

「もちろん、お前さんにも感謝してるぜ」

「どうも」

ＯＳの件はジャイルズ達に確かな絶望を与えた。なにしろ彼らにはその手の知識はあまりない。ほとんど最初からＭＳのシステムを組み立てるのは不可能だった。

しかし、シルヴァの地道な作業のおかげでＯＳも完成に近づいている。普通のＭＳが搭載している物とは違うが、知ったことではない。動けばいいのだ。

目の前の無愛想極まりない少年をジャイルズが見据える。どうもおかしい。そう思った。

この船の状況、そして彼の能力。なにかが引っ掛かる。コーディネーターはナチュラルの能力を上回る。だからＯＳの組み立てをやってしまえる奴がいたってなんらおかしくない。

だが、たった１５歳の少年がこんな技術を有しているとは。

（学校行けよ……）

少しズレていたが、ジャイルズはそう思わずにはいられなかった。

「よし。これで終わり……どうした？」

キーボードをしまったシルヴァが首を傾げる。

「いや、なんでもない」

呆れたようなジャイルズの表情を疑問に思うも、シルヴァは立ち上がり、コックピットから出て肩を鳴らす。そろそろ仮眠をとるべきだろう。瞼が重い。

「寝とけ。作業も後少しで終わるから」

ジャイルズの言葉に頷き、シルヴァは自室へ向かった。

◇◇◇◇◇

それは本当に突然のことだった。船内に警戒を促すアラートが鳴り響いている。ベッドの上で眠っていたシルヴァはのそりと起き、時計を見る。まだ３０分も経っていない。

枕元に置いてあった端末が鳴る。ジャイルズの顔が写しだされていた。

「なにがあった？」

エンジン部に事故でもあったのだろうか？　しかし、ジャイルズの顔は今まで見たこともないほど切羽詰まっている。

『早く格納庫に来てくれ！　ザフトの戦艦に見つかった！』

「……」

寝惚けている頭が徐々に覚醒していく。次第に事態の深刻さもわかってきた。ジャイルズに返事をした後、寝癖も直さぬまま部屋を飛び出した。

◇◇◇◇◇

こんな時でも人通りの無い通路を通り、格納庫へ。作業員たちが忙しく動き回っている。

「シルヴァ！」

指示を出していたジャイルズがこちらに気付く。

「なにがあった？　ザフトの戦艦って……」

「<ジン>のコックピットに行け！　艦長がお前に話があるって――」

そこまで言って<ジン>の近くにいた作業員がこちらになにかを大声で叫ぶ。ジャイルズも怒鳴り返して作業に戻っていった。

床を蹴って<ジン>のコックピットへ。シートに座り、回線をブリッジに繋ぐ。オペレーターの少女――確かクレアの友人だった――

が応答し、シルヴァの顔を見るなり艦長に繋ぐ。
デューク艦長はいつも通りの落ち着いた声で言った。
「まずいことになった」
この近くは連合、プラントの領域ではない。両者共に近づかない場所を選んでの演習なのだ。しかし、近くを通っていたザフトの戦艦が＜ブーゲンビリア＞を発見。しなくてもいい検問をすると言ってきたらしい。
確かにこの＜ブーゲンビリア＞はアメノミハシラで作られた船なのでどこのデータにも載っていない”手作り”の船だ。不審にも見える。さらに言えば積み荷もまずかった。
横流しされた＜ジン＞と＜シグー＞。言うまでもなくザフトの機体である。ばれたら大変なことになるだろう。
当然、逃げなくてはならない。誤魔化せる装備も時間もなかった。
デュークの説明を聞いたシルヴァは怒鳴りつける、
「どうしてそう、行き当たりばったりなんだ！　やばい訓練やるなら徹底――」
「そんなことを聞くために連絡したわけではない」
憤るシルヴァを遮ってデュークは言う。その表情は冷静を通り越して冷酷にも見えた。
「あちらは＜ジン＞三機を投入してきた。こちらも迎撃しなければ

ならない。だがこの船の武装は貧弱だ。……さて、どうすればいい？」

「は……？」

何を言っているか分からない。ＭＳは現代戦最強の兵器だ。こんな船では万に一つも勝ち目は無いだろう。というか＜ジン＞が三機も相手ならどんな戦艦とて撃沈は免れない。

ＭＳの相手はＭＳでなければできないのだ。

シルヴァはハッとして左のモニターを見る。＜シグー＞の姿は無かった。

（まさか……）

クレアが出撃したのだ。＜ジン＞を三機も相手に。この船を守るために。

「後はこちらでなんとかする。君は好きにしろ」

表情が凍るシルヴァにそう言い放ち、デュークからの通信が切れる。

「……」

＜シグー＞は＜ジン＞より高性能だが、今回は無理だ。クレアはＭＳを動かせるといっても実戦の経験などあるはずがない。

今こうしている間にも＜シグー＞は撃破されているかもしれない。今の＜ジン＞なら出撃自体は可能だ。両脚が無く、装甲も所々欠如

しているが、武器を持って出ていくことくらいなら――――

シルヴァは頭を抱える。なぜ自分がそんなことをしなければならない？　こんなスクラップ同然の機体で。援軍だって来ない。負け戦に決まっている。なにより、

（宇宙は嫌だ……っ！）

宇宙は暗く、静かで冷たい。しかし、”何か”が漂っているように感じる。シルヴァはそれが怖くてたまらなかった。

死ぬのもいい。殺すのもいい。関係ない。好きにすればいい。ただ、こちらには来ないでほしい。ナチュラル？　コーディネーター？　くだらない。くそ食らえだ。どいつもこいつも他人に迷惑しかかけられない連中じゃないか。

恐怖は怒りに変わっていく。こうやって巻き込まれていくのだ。くだらない戦いに。あの馬鹿どもがユニウスセブンに核を打ち込み、地球にＮＪを打ち込んだせいで自分がどれだけの苦痛を味わったか。

（どいつもこいつも……！）

外部スピーカーの電源をオンに。下で作業をしているジャイルズ達に叫ぶ。

「＜ジン＞で出る！　武器を出せ！」

いきなりのことに作業員の動きが止まる。それにすら苛ついた。

「早くしろっ！　宇宙の塵になりたいのか！？」

その声を機に弾かれたように動き出す。シルヴァはキーボードを取り出し、設定を変更する。

姿勢制御システムは使えない。マニュアルへ。機体各部への電力供給も調整。ガタガタの機体に合わせる。

「武器は＜キャットゥス＞を！　近くによこしてくれ！」

＜Ｍ６８キャットゥス５００ｍｍ無反動砲＞はＭＳ用に開発された兵器で、主に対艦戦闘などに使われる。しかし５０ｃｍもの弾頭は威力こそ高いが、取り回しには難があり機動力が鍵となるＭＳ戦ではあまり役にたたない。

それでも使わなくてはならないのだ。機体の状態ははっきり言って最悪。時間もかけていられない。なら、一撃必殺を狙うしかない。

固定されていた機体が解放され、自由になる。両手を器用に使って格納庫の出口へ向かう。ゾンビのようで非常に格好悪いが気にしていられない。

外を見渡す。近くに敵影はない。クレアが抑えているのか。傍らの＜キャットゥス＞を掴んで後ろを確認。ジャイルズ達は避難している。

視線を戻して宇宙へ。生温い、生臭い感触が体を包むような気がした。しかしそれを頭を振って破棄。ペダルを踏み込む。

ウイングバインダーが稼働し、機体が宇宙に投げ出された。

1―6

星々が輝く。美しい夜空が３６０度、どこまでも続いている。願わくば、こんな状況で観賞はしたくなかった。

白いパイロットスーツに身を包み、震える手でレバーを握る。クレアは＜シグー＞のコックピットの中で深く息を吐いた。

いきなりの出撃。相手は＜ジン＞が三機。僚機、増援、共に無し。最悪の状況だ。何故？　どうして？　そんなことを考えている暇もない。＜ブーゲンビリア＞を守れるのは自分だけなのだ。

＜ジン＞は完成していない。していたとしてもシルヴァを戦場に出すことはできない。彼は数日前まで一般人だったのだ。

『ＭＳ接近！　お願いね、クレア』

オペレーターのアニー・レスターの声が響く。クレアと彼女は短くない付き合いだった。死なせたくない。

「了解した……」

安心しろと言えない自分を情けなく思いながらペダルを踏む。＜シグー＞を進ませていると、何かが近づいてくる。

資料で何度も見たシルエット。＜ジン＞だ。格納庫にあった物とは違い、五体満足の姿。武装は＜ＭＭＩ―Ｍ８Ａ３　７６ｍｍ重突撃機銃＞が二機。残る一機は＜Ｍ６８　キャットゥス無反動砲＞を装備している。

どんどんと速くなる鼓動を感じながら、クレアの＜シグー＞も武装のセーフティを解除。システムを変更。戦闘用になった機体の出力が上がっていく。
＜シグー＞の左腕が敵機の方を向き、装備された＜Ｍ７０７０　２８ｍｍバルカンシステム内装防盾＞から砲弾が発射される。
三機の＜ジン＞は焦りを感じさせない動きで散開。難なく回避した。
攻撃してくるかと思いきや、ニ機はクレアの横を通りすぎて行く。
直接＜ブーゲンビリア＞を叩く気だ。追おうとするも残った＜ジン＞が重突撃機銃を連射。こちらも回避する。

「くそっ……」

相手の銃口が光る瞬間、体が震えた。回避機動も無駄に大きすぎる。
息が荒くなり、身体中の血液が暴れ回っているように感じられる。
クレアはデュークに回線を繋いだ。敵が接近していることを伝えるためだ。
しかし、

『シルヴァ・ウィンチェスターに迎撃させる。君は早急に敵機を撃破して戻ってこい』

冷静な声でそう告げられた。

「なっ……！　何を言ってるんです！　だって＜ジン＞は……」

『迷っている暇があったらさっさと目の前の奴を片付けろ。そうすれば挟み撃ちに出来る』

回線が切られる。クレアの頭は混乱の極みに達していた。そんな彼女を敵は執拗に追いかけ、攻撃してくる。時間稼ぎのつもりなのだろう。弾を惜しんでいるようだ。

迷っている暇はない。艦長の言う通りだ。クレアはそう思い、スロットルを引き上げた。

そういえばパイロットスーツを着ていない。慣れないＧとＯＳに戸惑いながらそのことに気付いた。いくらこのポンコツでも空気が漏れたりはしていないだろう。私服姿のシルヴァは変なことで不安を抱いていた。

不思議と死に対する恐怖も、人を殺すかもしれない恐怖も感じない。あるのは鉄の壁を隔てた向こう側にある、宇宙に対する不快感だけだ。

コックピットの中は案外広い。トイレの個室ほどだろうか。機体の火器管制系をチェックしながら体をほぐす。ほどなくして二つの機影が近づいてきた。

（さて……）

＜ブーゲンビリア＞は遠いところにいるはずだ。デュークの話では時間を稼いでクレア機と挟み撃ちにするらしい。それまであらゆる手段を用いて姿を隠すのだろう。

敵の機体は進んでくる。とっくに交戦距離だ。それぞれ＜重突撃機銃＞、こちらと同じ＜キャットゥス＞を持っている。

敵は左右に別れ、迫ってくる。猛烈なスピードだ。シルヴァは眉一つ動かさないまま機体を操作。背部のバインダーを噴かせ、上昇させる。

一機が重突撃機銃をこちらに向け、フルオートで発砲した。当てる気は無い。牽制である。７６ｍｍ弾が真空を切り裂いた。

こちらも負けず、トリガーを引いた。＜キャットゥス＞から砲弾が発射され、敵機に向かっていくが、避けられる。

（弾が鈍いか……）

油断なく相手を見ながら思う。重力の制約を受けない宇宙では、ＭＳのスピードについていけないのだ。だから相手も＜キャットゥス＞を使わない。無駄弾を嫌っているのだろう。

確実に当てたいなら、至近距離で撃つか、高度な予測射撃が必要だ。ガタガタの機体と素人のシルヴァには、そのどちらも出来ない。笑えるほど不利な状況である。

（なら……）

出力を上げ、ペダルを踏み込む。シルヴァの＜ジン＞は＜キャットゥス＞を持った敵機に凄まじいスピードで接近する。

いままで逃げてばかりだった相手が突然攻勢に出たのに驚いたのか、慌てて武器を構える。当然ろくな狙いがつくはずもなく、５００ｍｍ砲弾は空を切った。その隙を狙ってシルヴァも＜キャットゥス＞を相手に向け、発砲。しかし、敵の左腕部をもぎ取っただけに終わる。姿勢制御を手動で行っているため、大型の武器を振り回す時の

慣性を調整出来なかったのだ。

相手は破損した左腕をパージ。プライドが傷つけられたのか、腰から重斬刀を抜いて向かってきた。僚機は牽制のつもりだろう、重突撃機銃を向けている。

フルオートで発射された砲弾がシルヴァに迫ってくる。機体を操って回避するが、さすがに全ては避けられない。肩と脇腹に被弾。片手でダメージコントロールをしながら向かってくる敵に対処。シルヴァは短く息を吐き、＜キャットゥス＞を放り投げた。敵の斬撃はウイングバインダーの装甲に擦ったが、構わず組みついた。

力比べはシルヴァの＜ジン＞が優勢だった。こちらは脚部の電力を腕にまわしている上、相手は片手だ。手首部分を捻りあげ、破壊。重斬刀がこぼれ落ちた。もう一機の敵機は重突撃機銃を腰にマウントし、剣を抜いて加勢に向かってきた。

シルヴァの＜ジン＞は右腕を振り上げ、殴りかかろうとするも、直前に猛烈な衝撃がコックピットを襲う。蹴られたのだ。組み付いた相手との距離が開き、代わるようにしてもう一機が突進してくる。シルヴァは慌てもせず、近くに漂っていた＜キャットゥス＞を構えた。

今度は外さない。冷えきった思考で照準を合わせ、トリガーを引く。５００ｍｍ砲弾は胸部を捉え、＜ジン＞を爆散させた。もう一機の、両腕を破壊された＜ジン＞は僚機を撃破され、動揺しているのが透けて見える。ろくに回避行動もとれずに＜キャットゥス＞の餌食となった。

「……」

シルヴァは息を吐く。戦闘は終わった。人を二人、自らの同胞を二人、殺したのだ。

クレアの戦いはまだ続いていた。ふらふらと逃げる相手に苛立ち、迫る時間に焦る。そんなことで攻撃を当てられるはずもなく、時間が過ぎていく。

「ちっ……」

変化の兆しを見せない戦況とストレスは、クレアを幾分か大胆にさせた。それと同時に相手の動きが止まる。その不自然さを気に掛ける余裕もなく、＜シグー＞の背中にあるニ対のウイングバインダーを噴かせ、相手を猛追した。

＜シグー＞が左腕に装備している盾はバルカン砲を内蔵している。威力は高いとは言えないが、牽制くらいなら出来る。砲弾をばらまきながら背部にマウントされている重斬刀を抜き、斬り掛かった。

直前で気付かれたのか、際どいところで避けられた。相手は重突撃機銃を構えるが、慌てている。射線がグダグダなのだ。しかし流石にクレアも怯み、機体に回避機動を取らせた。

「くっ……！」

汗が噴き出す。危ないところだった。苛立ちで動きに精彩を欠くなど愚の骨頂。自分の愚かさにクレアは唇を噛み締める。

だが、一連の行動はクレアに冷静さを取り戻させた。落ち着いた気持ちで機体を操り、思考を纏める。

相手の＜ジン＞は重突撃機銃を乱射してくる。怒っているようだ。自分と同じく精神的に未熟なパイロットなのだろう。頭の片隅でそんなことを考えながらクレアは砲弾を躱す。

雨の如く降り注いでいた攻撃が止まる。相手の＜ジン＞は不思議そうに自らの武器を確認していた。弾切れのようだ。混乱から立ち直り、腰にあった予備のカートリッジを差し込むが、既にクレアの＜シグー＞は砲口を向けていた。

冷静に狙い、セミオートで放った三発の７６ｍｍ弾は相手の武器と右肩のジョイント部分に直撃した。大きく体勢を崩し、自分の右腕が破壊されたことに気付く。

緩慢な動作で腰から重斬刀を引き抜くが、既にクレアの＜シグー＞は目の前に移動していた。

「悪いな……」

敵機の左腕を斬り飛ばすと同時にクレアは呟いた。殺す気は無い。武装解除させられた相手は彼女に攻撃の意思が無いことがわかったのか、去っていった。

「……ふぅ」

軽く息を吐き、＜シグー＞を＜ブーゲンビリア＞に向ける。シルヴァを救わなければ。

掛かり過ぎた時間に絶望しつつも、それを振り切るようにペダルを踏んだ。

1―6（後書き）

ユリィィィィン！！

昨日のＡＧＥはこれに尽きます。絶対に死ぬでしょアレは。

あとラーガンね。来シーズン期待してます。ディーヴァは変形すると思ってた。グルーデックはもういいよ。ガンダムは武器がシンプルなんだからもう少し活躍して欲しいところ。

フリットさんじゃ無理か。

1―7

「あー、疲れた」

いつもよりも大分老けた顔でジャイルズは呟いた。周りにいる整備士達も同じ様子である。

彼らの前には五体満足の姿で佇んでいる＜ジン＞がある。戦闘の後、修理と整備と平行して完成させたのだ。累積した疲れは半端なものではなかった。

「問題はないか？　無いよな？」

手元の端末で＜ジン＞のパイロットであるシルヴァ・ウィンチェスターに呼び掛ける。

『左腕の反応が――』

その声を聞いた整備士達が一斉に＜ジン＞……というかシルヴァを睨む。全員の目がぎらついている。それ以上言ってみろ。血祭りにあげてやる。そういった無数の念が＜ジン＞に注がれた。

『……なんでもないです』

流石の彼も身の危険を感じたのか、引き下がった。

「まったく……」

ジャイルズはぼやいてからポケットを漁る。煙草を探していたがこ

こは船内だ。喫煙が許されるはずもない。そのことに気付いてから舌打ちした。

（一服ぐらい許してくれてもなぁ……）

煙草と酒は漢の命なのだ。それを禁じられたら自分は陸にあげられた魚のようになってしまう。耐え難いことだった。

ただでさえ予想外な事態が続いたのだ。この船の人間……特に整備士は多大な疲労を感じているだろう。この任務が終わったら何か奢ってやってもいいかもしれない。

生きて帰れればの話だが。

ジャイルズの頭がニコチンを欲していると、＜シグー＞のパイロットであるクレア・レイエットがこちらに来る。何かの連絡だろう。この船は通信機器が充実していないのだ。

「おう、どうした准尉」

ジャイルズは両手を広げた。親愛の証であると共に、隙あらば美少女を捕獲するためである。

「……艦長が呼んでいる。死ね」

クレアは一定の距離を置いてそう言った。最後の一言が余計だったが気にしない。ご褒美なのである。

「艦長？　なんの用事？」

「さあ？　多分、戦闘関連のことだろう」

クレアは全く隙を見せない。以前に捕獲されたことがトラウマになっているのだろう。ジャイルズは内心で舌打ちした。相手は１５歳の少女だ。異性としては見ていないが、からかうと楽しい。

男たるもの美女、美少女にはちょっかいを出すもの。ジャイルズが以前に勤めていた会社の社長がそう言っていた。最も、言った本人はそれが原因でモルゲンレーテをクビになったのだが。

「シルヴァは？」

ジャイルズが思考を彼方に飛ばしていると、クレアがそう尋ねてきた。視線は＜ジン＞の方を向いている。

「なに？　気になる？　そういうのお父さん許さないよ？」

ジャイルズとクレアの付き合いは長い。今は亡き彼女の父とも交流があった。おしめを取り替えたことは無いが、幼い頃から面倒を見ているのだ。

（それが……あんな……）

よりにもよってシルヴァ。無口、無気力、無愛想。三拍子揃ったダメ人間だとは。許されないことである。

一刻も早くシルヴァを亡き者にしなければならない。クレアは技術畑に咲いた花なのだ。全力をもって守り、障害は排除しなければならない。

「何を言っているんだ……？」

ジャイルズの思考が危険な方向へ直進していると、顔を引きつらせたクレアが言った。ドン引きしている。

「異性として意識はしていない。部下として気に掛けてはいるが」

「……」

ジャイルズは持てる全ての洞察力を注ぎ、クレアを見るが、嘘を言っている様子は無い。彼女の顔に浮かんでいるのはジャイルズへの嫌悪感だけだ。

「そうか……」

シルヴァの処刑を諦め、格納庫の出口へ向かう。その後ろではクレアが＜ジン＞にの方へ駆けていた。

◇◇◇◇◇

滅多に近寄らないデューク艦長の執務室の前でジャイルズは立ち止まる。柄にもなく背筋を伸ばし、ノックをしてから階級と名前を告げる。

「入りたまえ」

「はっ！」

扉が開き、中に入る。執務室といっても名ばかりで、室内はそこまで広くない。中央のテーブルに部屋の主が座り、何かの資料に目を通している。

「ここは厳密に言うと軍隊ではない。固くならなくていいさ」

「はぁ……」

椅子を勧められ、向かいの席に座る。少し間を置き、デュークが口を開いた。

「君はどう思う？」

「どう、とは？」

デュークは資料から目を離さないまま続ける。

「シルヴァ・ウィンチェスターだよ」

「……」

会話の意味が分からない。デューク・デクスターは優秀な艦長だと聞いていたが、ジャイルズは一介の整備士である。小難しい話など分からない。

「彼の戦果、おかしいと思わないかね？」

「まぁ……」

たしかに普通ではないだろう。両脚と各所の装甲、内部の機材。様々なパーツが無い＜ジン＞で同型の機体をニ機も墜としたのだ。大した損傷もなく。

「艦長はなにかご不満でも？」

刺々しい口調になる。シルヴァの戦果にケチをつける気だとしたら、それは許さない。ジャイルズの目から見れば機体のコンディションは手に取るように分かる。彼はあの最悪の機体で自分達を守ってくれたのだ。

そんなジャイルズの心情を察したのか、デュークは資料から目を離して言った。

「いや、そういうわけではない。純粋な興味さ。技術屋の端くれとしてね」

ジャイルズはぽかんとする。

「シルヴァ・ウィンチェスターの父とも知り合いだ。シルヴァとも幼い頃に会っているんだがね。本人は覚えていないらしい」

技術者の人間がなぜ艦長などやっているのだ。ジャイルズの思考がどんどんと混乱していく。

「だから気になる。彼はあの機体を見事に操ってみせた。＜ジン＞ニ機のおまけ付きでね。何故そんなことが出来るのか……」

ジャイルズは眉を寄せる。意図が見えない。彼は自分に何を期待しているのか。

「コーディネーターだからでは……？」

「相手だってコーディネーターさ。それも、訓練を受けた……」

そう言われるとジャイルズの表情も複雑になる。自らが整備した機体のことは誰よりもよく知っている。ゆえにシルヴァのやったことがどれほどのことか。その予想もついてしまう。そして、それはおそらく目の前にいる男も同じだろう。

「シルヴァの遺伝子は戦闘に特化しているのでは？」

「いや、私の記憶ではそんな事実はない。免疫力を上げた程度のはずだ」

「つまり……」

「天賦の才だよ。クレアもそうだが……そう考えるとナチュラルだのコーディネーターだの、くだらないことに思えてくる」

デュークが鼻を鳴らす。苦々しい表情だった。

「訓練も、戦いに対する気構えも無く、あんなことができるなら……ろくなことにはならん」

「シルヴァのことですか？」

心底腹立たしいといった顔でデュークは頷く。

「おまけにあの様子だ。なにかを諦めて……何かに憤っている。戦場にいれば近い内に死ぬだろう。あの馬鹿め。子供の様子すら分か

らんとは」

「……」

たしかにと、ジャイルズは思った。シルヴァとは出会って間もないが、少なくない数の言葉を交わした。無愛想で生意気だが、何かを抱えている。

デュークの言う通り、人間に対する考えが自分達とは違うのかもしれない。それを危うく思ってクレアも気に掛けているのだろう。

「しかし、この任務が終わってからも、アイツが軍にいるとは思えませんが」

ジャイルズがそう言うと、デュークはふむ、と呟いてから、

「そうかもしれん。だがこの船にいる間は私の子も同然だ。死なせたくはない」

憮然とした表情で言った。なんだかんだ言って心配しているのだろう。

「でも言うこと聞きませんよ絶対」

「だから君を呼んだのさ。ああいう奴は大人が手を引いてやらねばならん」

デュークは席を立つ。扉に向かう途中でジャイルズの肩を叩き、

「守ってやってくれ。子供を戦わせる情けない年寄りからの頼みだ」

哀愁を感じさせる声でそう言って去っていった。

1―8

カタカタとキーボードを叩く音が響く。格納庫の人影はまばらだ。<シグー>のメンテナンスが終わり、<ジン>もどうにか元の姿を取り戻した。

シルヴァは自機のコックピットで最終調整を行っていた。一度は退けたものの、ザフトが諦めたという保障はどこにもない。いつでも戦える状態にしておかなければならないのだ。

「……」

手を止めたシルヴァは先日の戦いを思い返す。迫りくる<ジン>を、大した恐怖も抱かず撃墜した自分。船の連中は持て囃してくれたが、そう喜ぶ気も起きなかった。恐怖しているのだ。

人を殺したにも関わらず、そのことになんの感慨も湧かない自分にである。普通の人間は初めて殺しをすると、錯乱したり、塞ぎこんだり、体調を崩したりするという。しかしながらシルヴァにはそんなものは一切無かった。

そこで気付く。自分はやはりおかしい人間なのだと。あんなに近くで人の命が散ったのに、こうして平然と仕事ができる。しかし同時に安心もしていた。

人の死に、痛みも罪悪感も感じない。過去の経験から考えると、それはとても素晴らしいことに思える。”血のバレンタイン”や”エイプリルフールクライシス”で味わった苦しみから、いまだに抜け出せないのだ。

宇宙は怖い。耳を塞いでいないと引きずられそうになる。暗く、深い闇に。

「……」

シルヴァは俯き、顔を右手で覆った。早く地球に帰りたい。しょせん生き物は大地から離れて暮らすことなどできないのだ。なら、早くアメノミハシラに戻らなければいけない。

深く息を吐く。仕事を再開しようかと思うが、下から人の気配がした。

両手にドリンクを持ったクレアはこそこそと歩いていた。ジャイルズは艦長に呼び出され、整備士達には束の間の休息が与えられている。何故か彼らはクレアが部下のところに行こうとすると怒るので、こうやってタイミングを見計らわなければならないのだ。

「まったく……」

床へ蹴って高く跳ぶ。無重力はなかなかに便利だ。開きっぱなしのハッチに着き、中を覗きこむ。

「……」

黒髪、碧眼の少年が露骨に嫌そうな顔をしている。クレアはドリンクを投げ渡し、下のベンチを指差す。

「話をしよう」

「……」

◇◇◇◇◇

二人は再びベンチに並んで座った。

「なんだ？」

ムスッとした表情のシルヴァが言う。この無愛想な態度に慣れてきたクレアは気にした様子もなく、

「この前のことだが……気に障ったなら謝る」

そう言った。以前に二人で話した時は、シルヴァが珍しく声を荒げて去ってしまったことでお開きになったからだ。色々と気まずく思っているうちにザフトと戦闘になってしまい、うやむやになっていた。

「いや……」

シルヴァはぷいっと目を逸らす。この少年は他人から素直な好意や謝罪を受けるとその場から離れようとするのだ。クレアは彼が逃亡する前に話を続ける。

「大丈夫か？　その、戦いのこととか」

「別に」

「そんなことはないはずだ。人を……殺したんだろう」

「……」

シルヴァは黙り込む。その横顔からは何も読み取れない。

「しかも、殺した相手はコーディネーターだ。お前の、その……同胞のな」

シルヴァは息を吐く。うんざりといった表情だった。

「……だからなんだ？」

「辛いだろう？」

「いや？」

「食堂にも顔を出してないじゃないか」

「宇宙で固形物を食うと吐くんだよ。そういう体質でね」

「むぅ……」

クレアは唸る。会話が続かない。迷っているとシルヴァの方が口を開いた。

「お前は早く寝ろ。ザフトだってまた狙ってくるだろうしな」

「そういうお前こそ、昨日から寝てないんじゃないのか？」

命令口調に眉を寄せたクレアが言い返すと、シルヴァはドリンクを飲んでから言った。

「肌が荒れるぞ。というか何故、お前は俺のことを逐一知ってるんだ。もしかしてストーカー？」

「違うっ！　初陣に戸惑っていた部下を心配してるんだ！」

目を三角にしてクレアが怒鳴るとシルヴァは呆れたように息を吐いた。

「そんなことで嗅ぎまわってたのか？」

「そうだ。それに、お前は色々と危なっかしいからな。上司の私が面倒を見てやらなくちゃいけないんだ」

それに、とクレアは続け、

「艦長から聞いたんだが……お前は父親とうまくいってないのか？」

シルヴァが顔をしかめる。そのことには触れられたくないらしい。

「私は色々と話した。お前も話すのが筋だろう？」

ジャイアン的な飛躍の仕方だった。シルヴァも唖然としている。それで観念したのか、ポツポツと話し始める。

「お前も知っていると思うが、俺の父親は技術者でな」

クレアは頷く。シルヴァの父、クラウス・ウィンチェスターはオーブでも名の知れた技術者だった。アメノミハシラが軌道エレベータ

ーとして開発されていた時から係わっており、軍事宇宙ステーションとなった今でも高い地位にいる。

「立派な方じゃないか」

クレアにとっては優秀なナチュラルは例外なく尊敬の対象となる。クラウスもその一人だ。

「あいつは最低の父親だ。母さんが死んだのをプラントのせいだと思い込んで、それでコーディネーターの俺を憎んでる」

「……」

シルヴァの母はS2インフルエンザで亡くなったと聞いた。ナチュラルに大勢の死者が出たのに対し、コーディネーターの被害は無く、プラントによるバイオテロの説が有力とされた。

「でも、だからって……」

クレア弱々しく反論する。確かにその話は分からないでも無いが、だからといって実の子供を憎めるだろうか？

「あいつは……オーブで造る新型のMSに俺に乗せたいんだ。だから騙してまでこんな船に乗せた」

憎々しげにそう言う。その言葉で彼が最初、乗船を拒否した理由もわかった。

「ならどうして、アメノミハシラに来たんだ？　父親が憎いなら無視すればよかった」

「……」

シルヴァは黙り込む。その横顔を見て、なんとなく察しがついた。母親の件はクラウスが息子を憎む理由になるかもしれないが、シルヴァが父親を憎む理由にはならない。

彼なりに父親との関係を修復しようとしていたのでないだろうか。なまじ、頭がいいために母親の件で負い目すら感じているのかもしれない。

そう考えると隣の少年がひどく健気に見える。やはり、ただの無愛想で生意気な人間ではなかったのだ。

自然と、クレアの口元に笑みが浮かぶ。それをシルヴァが睨んだ。

「なんだ？　他人の家庭環境がそんなに面白いか？」

「なっ！？　違う！　私は――――」

なんとなく、仲良くなれるとクレアは思った。その後も話し込み、ジャイルズが殴りこんでくるまで二人は言葉を交わしていた。

1―8（後書き）

クリスマスとか鬼畜の所業。故に連続更新。

1―9（前書き）

連続投稿とかね。ストーリーの進行速度が遅いから焦った結果です。

毎日投稿とかしてる人って多分人間じゃないと思う。

1―9

「あーあ。ったくよー」

気怠い仕草でベンチに座った少年――ハロルド・クスピーはぼやいた。金髪と軽薄そうにも見える美貌が特徴的な彼が乗っているのはザフトの補給艦である。先日、不審船との戦闘で被害を受けた友軍の援護に向かっている最中であった。

「そう言うなよ。あっちだって可哀想なんだから」

ハロルドの後ろでドリンクの持った少年が苦笑をする。彼はマイルズ・グルーバー。茶髪と人をくった笑みを浮かべたハロルドの同僚である。

「にしたって、なんで俺が……”赤”なんだぜ？」

ハロルドが身に纏っている制服は赤い。階級の無いザフトではエリートの証となっている。事実、彼は先の戦いでＭＡ１８機、戦艦を三隻ほど沈めていた。

「俺達が一番近くにいたんだ。それに――――」

マイルズの制服は緑であり、一般的な物だ。しかし、彼はハロルドと同等の成績を納めている。学校時代、女性関係で問題を起こしたせいで評価を落としてしまったのだ。

「知ってるよ。相手はＭＳだってんだろ？」

ハロルドは馬鹿にしたように言った。ＭＳを操れるということは”同胞”なのだろう。なにを考えてザフトに攻撃したかは不明だが、馬鹿な奴もいたものである。

「＜シグー＞はともかく、＜ジン＞は出来損ないだったんだぜ？ザフトの名が泣くってんだ……」

「補給待ちなのもあったんだろうがな」

呆れたように首を振るハロルドの言葉にマイルズが反論する。しかし、ハロルドの言うこともわかる気がした。今までほとんどの戦闘で圧勝してきたザフトでは、敗者は嘲笑される傾向にある。

だが、今回は少し状況が違う。二人が向かっているローラシア級八番艦＜タンディール＞は戦の直後で弾薬に限りがある状況のなか、調査を行った。抵抗されることも考慮しただろうが、ＭＳが三機もあれば大丈夫だと考えたらしかった。

しかし出てきたのは＜シグー＞と＜ジン＞。一機は武装解除され、＜ジン＞に掛かったニ機はまさかの撃墜。前に出ず、無理な追撃もしなかった＜タンディール＞は評価できるが、艦長は確実に出世コースを外れただろう。

異常な事態への対処として、たまたま近くにいたハロルドとマイルズが援護に向かうことになったというわけだ。エース二人を向かわせることでこの事件をさっさと終わらせようとのことらしい。

しかしマイルズの親友はいまだに愚痴を垂れている。

「休暇だったのによー。たまったもんじゃないぜ」
「休暇はちゃんと貰えるさ。今は前線も膠着状態が続いているからな。それに、面白そうだろう？」
「あー？　なにが？」
マイルズは口元に笑みを浮かべる。狩人の顔だった。
「ＭＳ相手の戦闘なんて、そうあることじゃない」
そう言うと、ハロルドも獰猛な笑みを浮かべた。
「確かにな。しかも評価だって上がる。悪い話じゃない」
ハロルドが立ち上がり、伸びをする。その視線の先には彼の乗機の姿があった。＜ジンハイマニューバ＞。＜ジン＞の発展機である。ＭＭＩ－Ｍ７２９エンジンを搭載し、各部に増設されたスラスターによる機動性は＜シグー＞すら上回る。
普通の装甲は緑を基調とした物なのだが、ハロルドは専用機として黄と黒でカラーリングしている。
「面白いな……確かに」
◇◇◇◇◇
件（くだん）の不審船はすぐに見つかった。存外、足が速かったがコースを特定しているため、大した時間はかからない。

<タンディール>に乗り込んだハロルド達はモニターで敵ＭＳの映像を見ていた。あいにく、<シグー>のものしかないが、おおよそのことはわかる。

「どう見る？」

ハロルドの隣で眺めていたマイルズが尋ねてくる。彼の瞳はモニターの中を飛び回る白い機体を映したままだ。

「筋はいいが……素人だな。回避機動でわかる」

「ああ。弾にビビってる」

二人の意見はほとんど同じのようだった。腕は悪くないが、機体に振り回されているように感じる。

「<ジン>の方が見たいね。屑鉄同然だったんだろ？」

ハロルドは言うと、マイルズはモニターから目を離して手に持っていた報告書を取り出す。

「報告によると、両脚部と各所の装甲が無い状態で出てきたらしい。武器は<キャットゥス>」

マイルズの言葉を受けてハロルドが馬鹿にしたように笑う。

「どんだけこの船のパイロットはヘボいんだ？　俺なら十秒かからないね」

「……」

マイルズが気遣わしげな目で見たが、ハロルドは気にしなかった。直後、モニターから通信が入る。二人は顔を見合わせた。聞かなくてもわかる。

出撃の合図だ。

「さーてと、始めるかぁ」

赤いパイロットスーツを着こんだハロルドはシートに座りながら言った。＜ジンハイマニューバ＞のハッチが閉まり、モノアイが光る。首の骨を鳴らしてからヘルメットを被る。

横ではマイルズと、生き残ったパイロットの＜ジン＞も機動している。ハロルドは自機を動かして得物である＜ＪＤＰ２－ＭＭＸ２２試製機甲突撃銃＞を掴む。

背部に接続されていたケーブルがパージされると同時に、＜ジンハイマニューバ＞は虚空へ身を躍らせた。スラスターが唸りをあげて機体をどんどんと加速させる。この瞬間がたまらない。ハロルドの顔に笑みが浮かぶ。

『おいハロルド！　早く出過ぎだ！』

まだ出撃準備が整っていないマイルズが通信で諌めてくる。ハロルドは笑いとばした。

「大丈夫さ！　なんたってエースなんだぜ！　俺は！」

これが彼の悪癖だった。敵を前にすると、周りが見えなくなる。それでもうまくいっているのは彼の能力が高いからで、彼が驕りを悔

いるほど強い敵が現れないせいでもあった。

間もなくニ機の敵ＭＳが現れる。＜シグー＞と＜ジン＞。報告通りだが、＜ジン＞は五体満足の姿だ。

「ハッ！」

それにも構わずハロルドは機体の速度を上げる。突撃銃を向け、セミオートで発砲。敵は二手に別れる。

「そぉら！」

手近な＜シグー＞に斬り掛かる。相手は回避し、突撃機銃をこちらに向ける。圧倒的な機動性を誇るハロルドの機体は難なく避けた。

やはり＜シグー＞の動きからは怯えが見える。それがさらに楽しくなって、ハロルドはトリガーを引いた。

＜シグー＞はまた避け、ハロルドも追撃しようするが、両者の間に一筋の閃光が走る。舌打ちしながらそちらを見やると＜ジン＞が砲口を向けていた。＜Ｍ６８キャットゥス　５００ｍｍ無反動砲＞と＜Ｍ６９バルルス改　特火重粒子砲＞をそれぞれ両手に持っている。

どちらも対艦戦闘に使われるような装備だ。ＭＳ相手に使うのは無謀と言ってもいい。あの＜ジン＞のパイロットはよほどの素人なのだろう。ハロルドはほくそ笑みながら＜シグー＞を追撃する。もう一機は無視しても問題ないと判断した。

機甲突撃銃は銃剣としても使えるが腰から重斬刀を抜き、横薙ぎに振るう。＜シグー＞も剣で防ぎ、つばぜり合いの形になった。

『ハロルド！』

しばらく＜シグー＞と戦っていた彼の元にようやく追い付いたらしいマイルズが僚機と共に現れる。

「大丈夫だ！　すぐ終わる！　この＜シグー＞だって……！」

『そうじゃないっ！　もう一機はどこだ！？』

「は……？」

その瞬間、マイルズの隣にいた＜ジン＞が緑の閃光に貫かれる。左半身が溶け、一瞬置いて爆発した。

「なんだと……？」

続いて一射、二射がマイルズ機を襲う。懸命に避けるが彼の＜ジン＞は重突撃機銃を破壊された。

『ちぃっ！』

開きっぱなしの回線から親友の焦った声が聞こえる。

「マイルズ！」

ハロルドの心臓が恐怖で震える。戦場では彼は狩る立場の人間だったからだ。華奢なＭＡと鈍い戦艦、非力なナチュラルしか相手にしていなかった彼は”敵”を完全に見誤っていた。”読まれていた”

のだ。自分の性格が。それを元にどう動くかも。

あの＜ジン＞のパイロットは＜シグー＞を囮にし、自分を釘付けにした。先行した自分から情報が来ると思っていたマイルズ達はその隙を突かれ、一機は撃破、もう一機は武器を失ってしまった。

圧倒的に有利だと思っていたのに、それは簡単に瓦解した。つい数分前まで侮っていた敵に。

「おまえェェっ！！」

逆上したハロルドは＜ジン＞に突撃する。相手は＜キャットゥス＞を撃つが、難なく躱した。重斬刀を振るうが相手も避ける。しかしさらに機体を操り、＜ジン＞に渾身の蹴りを見舞った。体勢を崩した相手に銃剣を突き刺そうとするが＜バルルス＞を盾にされ逃げられる。

ざまあみろ。そう思ったハロルドだが、すぐにハッとしてマイルズの方を見る。彼の機体は所々に穴が空き、左腕と右脚を失っていた。重斬刀しか武器が無い状態でよく粘っている。

「マイルズ！」

『俺の方はいい！　その＜ジン＞を片付けろ！　二人共やられ……くっ！』

＜シグー＞の攻撃を躱しながらマイルズが言う。普段冷静な彼から発せられる緊迫した言葉は、ハロルドをさらに混乱させた。

舌打ちして＜ジン＞に目標を絞る。マイルズも長くは保たない。＜

ジン＞は背中を向け、逃げ出した。またさっきと同じことをする気だろう。汚い奴だ。

頭に血が上ったハロルドはムキになって＜ジン＞を追う。こちらの機体の方が性能は上だ。極力冷静になり、機甲突撃銃を向ける。背中の推進部にニ、三発当ててから真っ二つにしてやる。ロックオンマーカーが敵機を追いかけ、捉えた。

「ざまあみろ……」

トリガーを引く。セミオートで発射された三発の砲弾は相手の背中を――

「なっ……！」

＜ジン＞は驚異的な動きを見せた。両脚を曲げ、勢いよく前に振る。後転の要領で方向転換した相手は砲弾を紙一重で避けた。

ハロルドは一瞬、なにが起きたか分からなかった。あんな機動（マニューバ）は見たことがない。

「……」

周囲の景色がひどくゆっくりに思える。凍り付いた頭で相手が砲口をこちらに向けているのがわかる。

死ぬ……！

そう思った瞬間、機体を動かしていた。僅かに腰を捻っただけだっ

たが、５００ｍｍ弾は右腕と背部のバーニアをもぎ取っただけに終わった。激しい衝撃がコックピットを襲う。

『ハロルド、退くぞ！』

中破したマイルズ機が呼び掛けてくる。ハロルドは近くのモニターを殴りつけた。従うしかない。

「あいつ……っ！」

憎悪に満ちた目で＜ジン＞を睨む。

この日、初めてハロルド・クスピーは敗北を味わった。

1―10

警報がうるさい。なにやらザフトの戦艦に見つかったらしい。二度目の襲撃だ。パックのゼリーを口にしながらシルヴァ・ウィンチェスターは天井を見上げた。

前の戦いを終えてから、何故か一睡もできない。ベッドで横になっても目が冴えているのだ。のそのそと起き上がり、クローゼットを開けた。

今度はちゃんとパイロットスーツを着なければならない。ぴっちりしているが案外動きやすかった。格納庫へ向かうとジャイルズ達が向かえてくれた。

「準備は？」

「バッチリだよ！」

ジャイルズはそう言ってヘルメットを投げてくる。キャッチし、シートに座ってから＜ジン＞のハッチを閉めた。

ＦＣＳを起動。火器管制系、索敵系をチェック。姿勢制御システムはオフでいい。

『武器は何にする？』

ジャイルズから通信が入る。ヘルメットを合わせながらシルヴァは応えた。

「<キャットゥス>と<バルルス>を頼む」

『重すぎだろ！』

<ブーゲンビリア>にある弾薬はそこまで多くない。元々テストのために積まれただけしかないのだ。そのためシルヴァとクレアが同じ武器を使うと、瞬く間に弾を使い切ってしまう。

機動力のある<シグー>に前衛を任せ、自分は重火器による一撃必殺にかける。シルヴァなりの考えだった。

<ジン>の一つ目に光が灯る。動かしながら各所の反応を確認する。少ししてからジャイルズ達が武器を用意した。

『クレアが外で待機中だ！　急げ！』

ジャイルズの怒鳴り声を受けて<ジン>を歩かせた。<ブーゲンビリア>の後方にある二重扉から脚部のパワーだけで跳ぶ。

すぐ近くにいたクレア機がこちらに来て、

『敵はまだ動いてない。今のうちに行くぞ』

「……」

『返事はどうしたっ！』

宇宙の空気を受けてぼんやりとしていた頭が、彼女の声でシャキッとする。

「了解……」

慣れてしまっている。機体を進ませながらシルヴァはそう思った。こうして、敵がきて、ＭＳに乗って、敵を倒す。まだ二回目だというのに出撃準備もスムーズにこなしてしまった。

人殺しに対する恐怖が無いという事実が、それを加速させているような気がする。初めは不満だったはずだ。＜ブーゲンビリア＞に乗ったことも、軍に入れられたことも。

ＭＳに乗る時だってあんなに嫌だったはずなのに、今ではパイロットスーツを着て、ヘルメットを被ってなんかいる。

殺しが好きなのだろうか？

「……！」

そう考えた瞬間、背筋がゾワリとした。違う。そんな人間にだけはなりたくない。元々、ＭＳに乗った理由はそういった連中に対する怒りから来たものだった。

しかし、なら何故自分はこんな兵器に乗ることを拒まない？　殺しを嫌悪しない？　考えても分からなかった。

「……」

再びぼやけてきた頭でモニターを見た。白いＭＳが先行している。あの中にいる彼女は何故、戦っているのだろう？　きっと怖いだろうに。

――世界に可能性を示してみせる。

彼女はそう言った。こんな汚い世界で。皆が皆、憎悪と嫉妬に支配されているような世界で。

彼女がわからない。しかしきっと彼女には見えるのだろう、”可能性”とやらが。

「……クレア」

気付いたら回線を繋いでいた。

『どうした？』

「お前はどうして戦ってるんだ？」

『いきなりなんだ？』

生気の無いシルヴァの声に、彼女は怪訝そうな声を返す。少しして、ため息を吐く音が聞こえた。

『その答えは帰ってからしてやる。……来るぞ』

「……」

敵が向かって来ている。そんなことは分かっていた。モニターを切

り替えると、一機のＭＳが映った。＜ジン＞に似ているが細部が違う。＜ジンハイマニューバ＞だ。

『速いな……。一機か？』

「……」

敵機は通常とは違い、黄色と黒でカラーリングされている。僚機がいないところを見ると、勘違い野郎か、何かの作戦なのか。

恐らくは前者。直感的にシルヴァはそう判断した。モニターに映る機体からは幼稚な敵意が伝わってくる。薄っぺらい勝利に酔い馴れた驕りという奴だ。

「下品だな」

『なんだ？』

「いや、なんでもない」

安心した。とりあえずあんなふうにはなっていない。

『私がやる。お前はあまり前に出るなよ』

クレアがそう言うと共に、敵機は機甲突撃銃を撃ちながら向かってくる。二人は左右に分かれて躱した。息もつかない速度で＜ジンハイマニューバ＞は迫り、＜シグー＞と揉み合いになる。敵の重斬刀を避け、クレアは銃口を向けるもいかんせん無駄が多い。

援護をするべきと判断し、＜バルルス＞で敵を狙う。でかいなりを

して三発しか撃てないというザフト製のビーム兵器だ。
メカニックが収束率を弄ったため、計算上は一発分のおまけが付くと言っていたが試射すらしていない状態である。もし失敗していたらただ扱いが難しくなっただけになるかもしれない。
運頼みの極みだと思いながら、クレアに回線を繋ぐ。
「＜バルルス＞を撃つぞ。その隙に離れろ」
『わ、分かった！』
焦った声が返ってくる。クレアが離れると敵もすかさず距離を詰めようとしてくる。見事な技量だ。
一瞬だけ開いたニ機の間を狙い、トリガーを引く。＜バルルス＞から緑色の光が放たれ、虚空を貫いた。たまらず飛び退いた敵機にクレアが畳みかけるが気迫に欠けている。軽々と避けられてしまった。
その後も＜ジンハイマニューバ＞は巧みな操縦でクレアを翻弄する。同じ轍は踏まないと思ったのか、援護できる隙もない。シルヴァの＜ジン＞すら眼中に無いらしい。
（まずいな……）
そろそろ敵の増援だって来るだろう。ニ対一でこの有様なのにニ対多になったら勝ち目が無い。シルヴァは目を閉じる。＜バルルス＞と＜キャットゥス＞は援護するには火力過多で取り回しが悪過ぎる。
かといって、この装備では接近戦など自殺行為に等しい。ならばど

うするか？

一瞬で思考を纏め、再びクレアに呼び掛ける。

「もう少し粘ってくれ。ここが勝敗の分かれ目になる」

クレアの返答を待たないまま＜ジン＞を動かす。極力バーニアを使わず、ＡＭＢＡＣで移動させた。敵が来た位置から増援のエントリー地点を割り出し、狙撃するため先ほど撃った＜バルルス＞のデータを使い、照準システムを組み換える。

漂っていた岩に機体を隠し、＜バルルス＞を構える。

こんな状況でも鼓動が速くならない自分の心臓に問題を感じながらもシルヴァはモニターを睨む。左の画面には苦戦している＜シグー＞の姿がある。クレアは本当にナチュラルなのか疑問に思うような動きで逃げ回っている。

少しして、ニ機の＜ジン＞が現れる。予測地点と少し違うが許容範囲だ。そちらに砲口をむける。間もなくしてシルヴァの機体が見えない事に気付いたらしい敵機が動きを止めた。

即座に狙いを定め、＜バルルス＞を放つ。一機の＜ジン＞を捉えるが、ややズレた。撃墜こそしたものの狙撃としては致命的だった。

修正する暇が無いまま、敵が動揺しているところに追い討ちをかけた。一射目は外れるが、ニ射目は重突撃機銃を破壊した。シルヴァは感嘆の息を吐く。自分の射撃技術よりも四発のビームを放った＜バルルス＞を褒めたい。

賭けには勝った。形勢は逆転したのだ。

◇◇◇◇◇

「ハァ…ハァ…」

喉が渇く。頭に血が溜まっている気がする。四肢が脳の命令通りに動いているか分からない。クレアは＜シグー＞のコックピットの中で恐怖に支配されていた。

敵のＭＳ、＜ジンハイマニューバ＞は執拗に追いかけてくる。黄と黒のカラーリングも相まって、巨大な蜂が迫ってくるように感じられた。重突撃銃と盾のバルカンを撃つも、全く当たらない。

エースだ。クレアは確信する。先日戦った相手とは動きが比べものにならない。それほどまでに相手の動きは敏捷で変幻自在だった。しかし、いつでも墜とせるだろうに敵はクレアの周りを飛び回っている。

遊ばれている。きっとそうに違いない。それだけ実力に差があるのだ。

「くっ……！」

悔しさを通り越して惨めになってくる。所詮、自分はナチュラルでしかないのだろうか？　コーディネイターには勝てないのだろうか？

混乱する。パニックになりそうな頭を懸命に動かして逃げ回る。シルヴァの姿は見えない。まさか見捨てて逃げたのか？

（くそ……っ！）

暴れだしたかった。ふざけるな。コーディネイターなど所詮、才能を金で買った連中じゃないか。こんなに努力しても、結局は勝てない。シルヴァにも、敵のパイロットにも。

クレアの中で暗い感情が吹き出す。それはいままで必死で押さえつけていた物だった。シルヴァを気に掛けていたのも、本当は優越感に浸りたかっただけなのでは？　もう自分の事すら解らなくなってくる。

機体のアラームがなる。接近警報だ。クレアが周囲を確認すると、＜ジン＞ニ機がこちらに向かって来ていた。

負けた。そう思った。手も足も出ない敵に加えてさらにニ機。勝てるはずがない。

「こんなところで……！」

クレアは嘆いた。なにも出来ない。山のように積み重ねた努力も、こうして崩れ去るのだ。なにも出来ず、なにも為せないまま。

そんな絶望的な光景に、光が走る。クレアは目を疑った。暗い宇宙を切り裂いた光は＜ジン＞を貫く。さらに二筋の光が走り、もう一機の武装を破壊した。

「……」

言葉を失う。光の元を辿ると、シルヴァの＜ジン＞が砲口を向けて

いた。＜ジンハイマニューバ＞は友軍機を撃破されたのがよほどショックだったのか、怒りに任せて突撃していく。クレアがそれを追おうとすると、シルヴァから通信が開かれる。

『こっちは俺がやる。お前は＜ジン＞を』

いつも通りの落ち着いた声だった。クレアは俯き、唇を噛む。結局、最後まで彼の掌で踊っていたのだ。

◇◇◇◇◇

黒と黄の＜ジンハイマニューバ＞が突撃してくる。こちらの機体とは桁違いのスピードだった。＜キャットゥス＞を放つ。掠めもせず外れた。敵機は重斬刀を一閃。辛くも躱す。

しかし攻撃がそこで途切れることはなく、さらに蹴りを放ってきた。まともに食らい、機体が大きく体勢を崩した。

相手は機甲突撃銃に取り付けられた剣を振りかぶる。特殊な分子加工を施されたそれは、堅牢なＭＳの装甲をもたやすく切り裂く。すぐ近くに迫ってくる死を鼻で笑い、エネルギー切れの＜バルルス＞を盾にして凌いだ。

力量では及ばない。＜ジンハイマニューバ＞のパイロットは紛れもないエースだ。付け焼き刃の技術では太刀打ちできないだろう。

冷静な頭でシルヴァはそう判断した。あのパイロットが同じくらい冷静なら今頃こちらは＜ブーゲンビリア＞共々、宇宙の藻屑になっていたに違いない。

しかし、そんなものは相手の驕りでこうも簡単に崩れ去った。醜い感情を隠しもせず、こうも表に出してくるような奴は嫌いだ。頭が痛くなってくる。

（負けられないか……！）

一瞬の隙を突いて背中を向ける。バーニアを全開に。相手との距離はみるみる開く。すぐさま＜ジンハイマニューバ＞も追ってくる。うんざりするようなスピードだ。腕でも、機体の性能でも負けている。舌打ちをしながら片手でキーボードを叩く。肩関節を固定する。大した時間も稼げないままロックオンされた。アラームが鳴り響く。最後の運試しだ。

瞬間、頭に電流が走ったような気がした。相手がトリガーを引こうとしていることが分かる。その感覚に従って機体を操作。

＜ジン＞のバーニアを切り、両脚を曲げ、反動をつけて前に降る。特異なＡＭＢＡＣが機体を一瞬にして方向転換させた。敵の砲弾は＜ジン＞の頭の脇を通り過ぎていく。同時にこちらの砲口が敵を捉える。

時間が止まったような気がした。トリガーを引く。飛んでいく砲弾は酷くゆっくりに見える。それは敵機の右腕を破壊した。

ゆっくりだった時間が帰ってくる。戦う手段を無くした相手は殺気を撒き散らしていたが、クレアと戦っていた＜ジン＞のパイロット

に諭されたのか、帰っていった。

「……」

勝利に喜ぶわけもなく、ヘルメットを息苦しくなって取る。それでも息苦しさは消えなかった。

「勝ったのか……？」

敵機が去っていくのを見て、クレアは呟いた。つい先ほどまで近くにあった死が離れていく。信じられなかった。シルヴァはあの＜ジンハイマニューバ＞に勝ったのだ。クレアが手も足も出なかった相手に。

どうしてこうなのだ。敵の動きを見て、状況を見て、先を読んで、冷静に対応する。あんなことが努力してできるのか？　それともあれがコーディネイターなのか？

「……」

機体の進路を＜ブーゲンビリア＞へ向けながら。考える。疑問、嫉妬、羨望。闘いが終わり、緊張が解けると同時に様々な感情が噴き出した。

シルヴァはおかしい。戦闘に関しては自分より素人のはずだ。その彼が二度の闘いで自分とは比較にならない働きをした。

そんな事、許容できるわけがない。結局、努力ではどうすることも

できない。ナチュラルでＭＳを動かせる……そんなことで舞い上がっていた自分が馬鹿らしかった。

そんな気分のまま母艦に着くと、ジャイルズを始めとしたメカニック達が迎えてくれた。

ヘルメットを取り、汗を拭いながら＜シグー＞のコックピットから降りる。同じくして隣の＜ジン＞からもシルヴァが着地した。

涼しげな顔だ。汗一つかいてない。普段のクレアなら彼の表情がいつもより僅かに暗いことに気付いただろうが、今の彼女にはそれが酷く苛立たしく思えた。

自分がパニックに陥りかけるような戦いでも、シルヴァには余裕があるのだ。そう見えてならない。

クレアは俯く。そんな自分を醜いと思った。泣きたくなるほどに。

シルヴァと目が合う。なにか労いの言葉を掛けなければ。そう思った。

しかし、シルヴァは顔をしかめた。何か嫌な物でも見たように。まるで自分の中にある醜い感情を見透かされているように感じた。

「馬鹿にして……っ！」

クレアの頭の中で何かが切れる。気がつけば彼の頬を殴ってしまっていた。

１―１０（後書き）

なんか見返してみたら、最初の方が酷い事になってますね。准尉が準尉とか、ＮＪがＮＪＣとか。

シルヴァの設定も違うくなってるし、どうしてこうなった。（´Д｀）

作者が無能だからですねわかります。

1―11

（まったく……）

いつもならうんざりするところだが、今度ばかりはシルヴァに同情する。ジャイルズは手元のファイルを見やりながら思った。

彼の前には<ジン>のシートに座ったシルヴァがいつも通り……いや、いつもよりさらに暗い顔でキーボードを叩いている。

（どうするかなぁ……）

いまだに信じられない。つい数時間前、シルヴァはクレアに殴られた。その瞬間、勝利に湧いていた格納庫が静まりかえったのだ。

クレアは生真面目で不器用だが優しい娘だ。彼女が小さい頃から知っているジャイルズがそう思うのだから間違いない。そんな彼女が珍しく他人に手をあげた。

なぜそんな事をしたか？　考えればすぐにわかる。シルヴァと自分との差をはっきりと感じてしまったのだ。長い間苦しい訓練を耐えた先に、大した志もない素人に抜かれたら誰だって認められないだろう。

まだ相手が同じ立場だったらクレアもこうはならなかった。それを認めて努力できるのが彼女の長所だ。

しかし――――

「……」

シルヴァを見る。こんな、人の感性を持っているかも怪しい奴だからこそクレアも感情を制御出来なかった。相手の事が理解できないのだろう。

デュークから話を聞いて、ジャイルズなりにシルヴァを気遣っているつもりだ。この少年は無愛想だが悪人ではない。敵の死を喜んだりもしなければ、自分の技量に慢ったりもしない。ただ淡々と、事実を受けとめる。

他人から見ればそんな様子は余裕があるように見えるだろう。クレアもそう感じたはずだ。

しかし、とジャイルズは思う。本当に彼はなるべくしてこうなったのか？　こうやって陰気な顔で仕事をしている少年は自分で望んでこうなったのか？

「……」

違う気がする。最初の出撃の時、シルヴァは怒鳴っていた。つまりは何かに怒りを感じていたのだ。おそらくそこに彼の闇がある。

「なあシルヴァ」

探ろうと声を掛ける。

「なんだ？」

「宇宙は好きか？」

少年は眉を寄せた。酷く嫌そうに、

「……大嫌いだ」

「どうして？」

しつこく質問してくるジャイルズにシルヴァはハッキリと言った。

「あんたには関係ない」

「はぁ……」

クレアはため息を吐く。かつて無い自己嫌悪に見舞われていた。向かいの席にはオペレーターのアニー・レスターが座っている。二人は人気（ひとけ）の無い食堂で雑談していた。

「それにしても珍しいわね。あんたが手あげるなんて」

「……反省している」

クレアの長い銀髪が、力無く垂れる。彼女は暗い口調で続けた。

「調子に乗ってたんだ。ＭＳを扱えるからって……。でもあの＜ジンハイマニューバ＞に手も足も出なくて、シルヴァがそいつに勝って……」

途中から涙声になっていく。そんなクレアをアニーはドリンクを飲みながら見ていた。彼女とは長い付き合いだった。ひょんな事から

知り合い、クレアが血の滲むような訓練をしていた所も見ている。

「嘘。他にあるんでしょ？　引き金になったことが」

涙目のクレアはうぅ、と唸ってからぽつぽつと語り出す。

「コックピットから降りた時、シルヴァと目が合って……。嫌な顔をされた」

「嫌な顔？」

「うん。というより、嫌な物を見る目だった」

アニーは天井を見上げた。わけがわからない。そんな彼女を尻目にクレアは続ける。

「嫉妬とか、私の中にある汚い感情が見透かされてるような気がして……」

「思わずひっぱたいたと？」

クレアはこくりと頷いた。アニーは彼女にハンカチを渡しながら、ため息を吐いた。

「つまり、人の心が読めるってこと？」

ありえない、と頭を振る。そんな人間がいるはずない。アニーもシルヴァ・ウィンチェスターの事は知っている。黒髪碧眼、色白で無表情。見た目は中々に良かったが、暗い印象だった。

そんなシルヴァだが、彼があげた戦果は凄まじいの一言だった。素人のアニーでもそれくらいのことはわかる。仮にザフトでしかるべき訓練を受けていたらエースとして有名になっていたかもしれない。

シルヴァの陰に隠れがちだが、クレアも素晴らしい素質を持っている。初陣で＜ジン＞一機を戦闘不能に、次の戦闘でも同じことをしている。ナチュラルなのにだ。

そう考えると、この船のパイロットは何気に凄い者の集まりではないのだろうか。アニーはそんなふうに思っていた。

「じゃあシルヴァくんは超能力者ってことだ」

アニーが茶化して言うと、ハンカチで顔をぐしぐし拭いていたクレアが唸った。

「そうじゃない。ただ、あの時はそう思ってしまっただけだ」

「……」

「どうした？」

突然黙り込んだアニーにクレアが尋ねる。しばし考えこんだ後、ぼそりと言った。

「もしかしてさ」

「なんだ？」

「本当に超能力なんじゃない？」

「はぁ？」

あまりに突拍子のない発言だった。クレアの表情は友人の精神状態を案じるものへと変わった。

「空間認識能力……だっけ？　そういうのを持った人が連合軍とかにいるって話、聞いたことあるでしょ？」

「あ、ああ……」

「シルヴァくんもそれなんだよ、きっと」

地球連合の機体に、＜メビウス・ゼロ＞という物がある。現在ではMSと対等に戦える唯一のMA（モビルアーマー）だ。その理由として＜ガンバレル＞が挙げられる。それは四方に飛び、機体とは全く別の場所から攻撃することが可能なのだ。そんなものを使われてはコーディネイターといえども回避することは困難になる。

非常に強力な兵器なのだが、空間認識能力に特化した人間にしか扱うことができない希少な物だった。

「あれは科学的に分かっている物だろう？」

クレアがそう言うと、アニーはフッと笑い、

「じゃああんたにはその感覚がわかるの？」

「いや、そういうわけじゃないが……」

「でしょ？　人間だって動物なんだから進歩するはず。どっかの本で読んだわ。たしか……ＳＥＥＤ理論？」

「……」

クレアは辟易する。確かにそういった話もあるが、空想に過ぎない。第一、そんなものが現れたらコーディネイターの立つ瀬が無くなってしまう。

「だが、一理あるかもしれん」

シルヴァが本当に他人の思考を読み取れるなら、彼が現在の性格になったのも頷ける。憎悪や嫉妬が世界を包んでいるような時代だ。さぞ苦しいだろう。

「あいつは以前、感情を表に出す人間が怖いと言っていた」

以前、シルヴァが突然怒った時の事だ。彼があの時言っていたことを思い出す。ユニウスセブンから地球に降りて来て、オーブに移ったらしい。だが何故、移らねばならなかったのか。

シルヴァの能力なら実力主義のプラントでも特に問題は無かったはずだ。

「てかさ」

思考に沈んでいると、アニーが口を開いた。

「む？」

「超能力説が本当なら、あんたも嫌いな人間にカウントされたってことじゃない？」

「……？」

「嫌な顔されたんでしょ？　だったら決まりじゃん」

「ち、違う！　私は別に、思った事を顔に出したりしてないっ！」

必死に反論するクレアをアニーはイタズラっぽく笑い、

「感情を表に出すって、そういうことじゃないでしょ」

「意味がわからない」

「比喩表現よ。感情で行動するってこと。血のバレンタインとかね。あんたも危なそうに見えたのよ、きっと」

「……」

ふるふるとクレアは震えている。あんまりな言い方だったか、アニーはそう思った。

「わ、私はブルーコスモスじゃないぞ……？」

「でも嫉妬したんでしょ？　かなり強烈に」

その言葉がトドメとなったのか、クレアは席を立ち、廊下に向かって走っていく。出口付近で立ち止まり、

「ハンカチは洗ってから返すからなっ！　バーカ！」

律儀な捨て台詞を吐いて逃げて行った。からかい過ぎたらしい。

「……馬鹿な子」

ため息を吐く。第一、超能力者などいるわけがない。よしんば居たとして、そんな人間がこんな時に、こんな船に、そしてクレアのような特別なナチュラルと出会うなど、あり得る訳がないのだ。

「運命ねぇ……」

アニーは呟く。運命、奇跡、赤い糸。そんな善い物では無いような気がした。

◇◇◇◇◇

暗い一室。＜ブーゲンビリア＞の艦長であるデューク・デクスターは自室で報告書をまとめていた。テストこそ行えなかったものの、実戦で得たデータは貴重な物だ。それとは別に今回の不手際を指摘しなければならないが。

ザフトからの追撃も振り切ったと見ていいだろう。これ以上こちらに構う余裕があるとは思えない。

敵の母艦を叩いておくべきだったが、将来のあるパイロット達に限られた装備と時間でそんなことを命じられるほど、デュークは無能ではなかった。

「……」

一通りの仕事を終え、デュークは目を揉む。そして別の資料を取り出した。シルヴァ・ウィンチェスターの戦闘データである。＜ジン＞に搭載された学習型コンピュータが機体の動きやパイロットのクセなど、逐一数値化して記録する。

それを洗い直して文章にし、提出用にまとめた物だった。シルヴァによって書かれた報告書もある。デュークのことが猿に例えてあり、必要以上に丁寧な物だ。

「ほう……」

子供じみた挑発には目もくれず、それを読んでいく。デュークにはパイロットのことはわからないが、ＭＳを兵器という観点から見た場合の事ならわかる。

結論から言うと、シルヴァ・ウィンチェスターにテストパイロットの才能は無さそうだった。ＯＳによる姿勢制御のアシストを受けず、照準システムの方にまで手を加えている。これでは＜ジン＞のろくなデータが取れない。非常時だったためデュークも口を出さなかったが酷い物だった。

反面、ＭＳという物の柔軟性が如実に分かる。ここまで手を加えてもきちんと戦果をあげられるのだ。もしかしたら本国のＭＳ開発の動きも加速するかもしれない。

（まさか……）

嫌な予感がした。シルヴァの父親は本国のＭＳ開発に深くかかわっている。これでは何かを企んでいるとしか思えなかった。

「ふむ……」

だがシルヴァはこの任務が終わったら軍を辞めるはず。数日後には普段の生活に戻り、父親の言うことも無視するはずだ。

「考え過ぎか……？」

どの道、シルヴァに干渉出来なくなるだろう。彼は既に就職している。一人立ちしているのだ。

しかし――――

（この数値……）

デュークは眉を寄せた。シルヴァには天賦の才がある。反射神経、機動選択、ＭＳへの知識、それらが総じて高い。さらに言えば、行動予測。これは異常な正確さだった。

そんな彼が、こうやって戦いに巻き込まれていくのだ。デュークは現実主義者だったが、これでは何かを勘ぐってしまうのも仕方のないことだろう。

人の思惑などより、もっと大きな流れが宇宙にはあるのかもしれない。そう思わずにはいられなかった。

1―11（後書き）

今までの間違いをいくつか修正。指摘をしてくれた方に感謝です。

皆さん良い年末を。

1―12

頭に電流が走ったような気がした。妙な感覚だ。彼はベッドから起き、窓から宇宙を見た。

ヴィレッジ・プレオベールは欠伸をして地球連合軍指定の制服に着替える。二十代半ばで瞳は黒。独特の暗さを含んだ表情を浮かべて部屋を出た。

彼は地球連合でも特別な存在だった。乗機である＜メビウス・ゼロ＞は存在するＭＡの中でも最強を誇り、一部の人間にしか扱えない。ザフトの＜ジン＞も既に両手で数えきれないほど撃破している。

それに加え、ヴィレッジはあらゆる手段でコーディネイターを殺した。銃殺、刺殺、爆殺、ｅｔｃ…。殺す理由など山ほどある。後ろ暗い事ばかりしているため”エンデュミオンの鷹”のような二つ名も無かった。

しかし、ただなんとなく、息を吸うように日常の一部として戦いをしてきた彼だからこそ、未知の存在への好奇心には弱かった。子供じみた動機だったが艦橋（ブリッジ）にあがる。

「おや、小佐。お休みでは？」

艦長席に座っていた男が立ち上がり、こちらに笑みを向ける。小太りで髭をたくわえた、どこにでもいそうな中年オヤジだ。

「艦の針路を変えるぞ。パイロットも待機させろ」

「は、しかし……」

いきなりの指示に艦長は難色を示す。今は基地への移動中だった。勝手に針路を変えれば厳罰が降るだろう。ヴィレッジは彼を席に座らせ、耳元で囁いた。

「いいんだよ。私の言うことだ。……出世したいんだろう？」

それは殺し文句だった。無能だが処世術に長けている者ほど連合のような組織では上に行ける。そういった意味ではヴィレッジの隣にいる男は十分にその資格があると言えた。

ドレイク級改修艦＜ヘレドト＞は針路を変える。その遥か先にはザフトを撃退したばかりの＜ブーゲンビリア＞の姿があった。

◇◇◇◇◇

ヴィレッジが気付くより早く、＜ジン＞のコックピットにいたシルヴァはその存在を察知していた。近くにいたジャイルズを呼ぼうと思うが、止めた。なんと言えばいい？　敵が来ると言っても信じてもらえるわけがない。得体の知れない物を見る目を向けられるのは嫌だった。

しかし、こうしている間にも敵はこちらに気付くかもしれない。戦いとはいつだって先手を取った方が勝つのだ。少なくとも自分の機体だけはいつでも出撃できるようにしておかなくてはならない。

少し考え、シルヴァは下にいるジャイルズに声を掛けた。作業服姿の中年男がハッチに上がってくる。

「どうした？」

「＜ジン＞の武装は何が残ってる？」

ジャイルズは手元の端末を確認し、

「……結構使ったからな。＜キャットゥス＞は整備が終わったし、＜パルデュス＞は一式あるぞ」

＜Ｍ６８パルデュス　三連装短距離誘導弾発射筒＞は＜ジン＞のＤ装備に分類される物で、脚部に装備される三連ミサイルポッドだ。非常に取り付けやすい上、使用後はパージできる。さらには短距離ながら誘導性能まで持っているという優れ物だった。

「よし、それを取り付けてくれ。＜キャットゥス＞も頼む」

「はあ？　アメノミハシラまで一日足らずだぞ。なんでいきなり……」

「あるだけくっ付けてみたくなるだろう？　男ならな」

いきなりの要求に顔をしかめたジャイルズだが、シルヴァの言うことは理解できる。火力増強のオプション装備とはロマンなのだ。使い捨てというのもまたいい。思えば完成してから＜ジン＞をゆっくり眺めたことも無い。

加えて”男なら”とまで言われたら黙っているわけにはいかなかった。

「だか散らかすのもなぁ」

「片付けなんてのはアメノミハシラの連中にやらせればいい。職務怠慢の罰だろうよ」

「うむぅ……」

アメノミハシラも改修工事で多忙を極めていたのはシルヴァとて理解していた。だが、こうでも言わなければジャイルズも動かない。

年上のメカニックが下に降りていくのを見送りながら、シルヴァは強い危機感を抱いていた。なにかよくないことが起こりそうな予感がする。

ユニウスセブンが核攻撃を受けた時の、人の命が光り、溶けていくような感覚。ＮＪが地球に打ち込まれた時は慢性的で大気に人が混じっているように感じた。

そして先ほどの感覚。あそこまで”死”の臭いがこべりついた人間は初めてだった。それになにか、もっと嫌な物を持っていそうな気がする。探ろうにも不快感が邪魔をした。汚物の中に手を突っ込みたくなどない。

（くそ……っ！）

こういう物が直接頭に響くから、宇宙は嫌いだった。悪意、嫉妬、殺意。皆、それしか持っていない。これでは戦争など終わるわけがないのだ。

「……どうせなら皆、死ねばいいのかもな」

考えてはならないことだとわかっていても、シルヴァはそう思ってしまう。もう嫌だった。宇宙も、人も、戦いも。自分が眩しいと思った少女でさえ、結局は他の人間と変わらない。

ひどく疲れていた。寝ていないせいもあるが、もっと根本的な部分の問題だ。暗い気分でシルヴァは機体の調整を始めた。

ヴィレッジが何かを感じた宙域には不審船がいたらしい。普段なら捨て置くところだが、そうはいかない。恐らくあの感覚の原因はその船だ。

「小佐」

呼び止められ、ヴィレッジは振り向く。彼とは違う色のパイロットスーツに身を包んだ少女が立っていた。

「どうした？」

少女――エノーラ・グウィンは少し逡巡する。

「我々が向かっている宙域には……いやな感じがします」

彼女もヴィレッジと同じ＜メビウス・ゼロ＞のパイロットだった。上から面倒を見るようにと押しつけられたのだ。そんな彼女にも勿論、特殊な空間認識能力がある。

「ふむ……。だが得体のしれないモノがいるなら、調査しなければならんさ。そういうのも我々の仕事だ」

「しかし……」

口ごもる少女の肩に手を置く。努めて柔らかい声で、囁く。
「不安なのはわかる。だが我々のような者が戦場では前に立たねばならん。……わかるだろう？」
「はい……。申し訳ありませんでした」
エノーラは頭を下げ、去っていく。その姿を見送ったヴィレッジはヘルメットを着けて乗機へ向かった。母艦である＜ヘレドト＞はドレイク級を改修した物で、駆逐艦に近い性能を有している。全長は１３０Ｍ程であり、各部にドッキングする形でＭＡを四機まで運用できる。＜メビウス・ゼロ＞と＜メビウス＞がニ機ずつ。混成部隊だ。
「さてと……どうなるかね」
モニターが明るくなり、ハッチが閉鎖される。＜ヘレドト＞とのドッキングを解除。機体が無重力の中に浮いた。間もなく他の機体も到着。各所にあるバーニアを使って制御し、編隊を組んだ。
ヴィレッジはヘルメットのバイザーを開き、シートの下からリンゴを取り出す。彼は出撃の直前に果物を食べると決めている。儀式と言ってもいい。
「＜ヘレドト＞は現宙域で待機。ＭＡ部隊は先行して不審船を調査する。エノーラが指揮をとれ」
『了解』

少し固いエノーラの声が返ってくる。ヴィレッジは口元に笑みを浮かべた。

「何が出てくる……？」

◇◇◇◇◇

やはり来た。警報が鳴り響く中、＜ジン＞のコックピットでシルヴァは確信する。近づいて来るのは間違いなく自分に似た存在だ。周りにある物を認識できる。

世間一般には空間認識能力と呼ばれ、兵器にも利用されたりしているが、シルヴァの力はそんなにいいものではなかった。

何がどこにあるか、というより、誰がなにを考えているのか。それを感じることができる。特に悪意や嫉妬といった汚い類の感情が見えることが多かった。

そんな彼だからこそ、人が怖かった。今の世界は憎い。目障りだ。殺したい。そう思って実行に移す。裏になにか経済的、政治的な考えがあるわけでもないのに。

他者を別の存在としか捉えられず、自分が世界の中心だと思っている。常に正しいのは自分とそれに従う者。それ以外は悪で所詮わかりあえない別の生き物。

そんな感情が渦を巻き、宇宙に充満すれば、もはや地球に逃げ込むしかない。地上の大気は彼を守ってくれた。

しかし、

宇宙に来てみればこれだ。わけもわからず巻き込まれ、敵を撃退すれば嫉妬されて殴られる。自分の同類が現れたと思ったらそいつは死の臭いを撒き散らして向かってくるではないか。

ふざけるな。そう思った。

電源ケーブルを切り離し、＜ジン＞を歩かせる。やや重い。重量に合わせてシステムを調整。＜パルデュス＞のデータも頭に入れておく。固定されていた５００ｍｍバズーカを持ち、重斬刀も腰にマウントする。

『本当にその装備で行くのか？　相手は＜メビウス＞だぞ』

＜シグー＞に掛かりっきりのジャイルズが怒鳴ってくるが気にしない。

「足の速いＭＡが相手なら、最初に頭を押さえておかなきゃならないだろ」

二重扉が開く。視界が暗い宇宙に瞬く星達を捉えると共に、こちらに近づいてくる敵をより確かに察知した。＜ジン＞が軽く飛び、＜ブーゲンビリア＞から離れる。

駆動系に問題がないことを確認。バーニアを使って姿勢を調整し、息を吐く。そこで向かってくるものの数が増えていることに気付いた。

「二つ……？」

大きいのと小さいのが一つずつ。片方に気をとられていたらしい。敵の正確な数はわからないが、少なくとも自分と似た存在が二人いる。戦場にだ。シルヴァはそのことに強い怒りを覚えた。

ペダルを踏み、スロットルを回す。＜ジン＞のウィングバインダーが機体を加速させる。操縦桿を握り締めて、シルヴァの＜ジン＞は敵に向かっていった。

◇◇◇◇◇

「……」

エノーラ・グウィンは＜メビウス・ゼロ＞を操縦しながら眉を寄せる。なにか嫌な感じがした。頭の奥――第六の感覚が訴えかけてくる。それが示す先には敵がいるのだろう。着々と距離が狭まっているとわかる。

空間認識能力は稀有な才能だ。それを買われてＭＡのパイロットになった。だがそれはただ、敵がどこにいるか、ガンバレルの砲口がどこに向いているか。それがわかる程度のものだった。

しかしこの感覚。接近して来る敵が発してくるのか、初めてのものだ。ＭＳを扱えるということは間違いなくコーディネイター。自分と同じ存在がそれというだけで、強い嫌悪感を覚えた。

アラームが鳴る。接近警報。そんなことはとっくにわかっていた。

「たかが＜ジン＞の一機くらい、このゼロなら……」

<ジン>と<メビウス>の戦力比はおよそ一対五だといわれている。だがそれは普通にぶつかった場合の話だ。きちんと連携を組み、各々が役目を果たせば簡単に覆る。その程度の差なのだ。事実、エノーラは何機もの<ジン>を撃墜している。

白い尾を引き、一つ目の巨人が迫ってくる。鶏冠のようなレーダーアレイがついた頭部。巨大な羽に似た背部の推進器。鎧に覆われた姿は武者に近い。<ジン>だ。バズーカと重斬刀。脚部には三連装のミサイルポッドを装備している。

エノーラは僚機に散開を命じた。コーディネイターの能力はナチュラルを上回るが、精神的にはそう変わらない。驕りもするし、油断もする。生まれつきの能力も機体の性能も圧倒的であればなおさらである。

そしてこちらは数では圧倒している。エースを主軸にサポートし合えば勝てるのだ。それが戦術である。

<ジン>から発せられる嫌な感覚を振り切り、四基のガンバレルを展開。敵機を取り囲むように配置。

ニ機の<メビウス>が向かっていく。パイロットはいずれもベテランだ。

「……目にもの見せてやる」

危険な狩りが始まった。

1―13

『ああ。だからシルヴァの奴、先に行っちまいやがった』

モニターの中でジャイルズが頭を掻く。クレアは耳を疑った。＜ブーゲンビリア＞の格納庫。＜シグー＞のコックピットで彼女は毒づいた。

「だって、敵は……＜メビウス＞だろう！？」

たかが、と言いそうになってクレアは自分を戒める。敵の数は三機。常識的に考えれば＜ジン＞一機でも充分に勝てるだろう。だがそれでも、置いていかれたのはショックだった。

自分がいなくても勝てる。そう思われたのだ。確かにシルヴァと比べれば活躍していないかもしれないが、それでもやはり――

『出撃準備出来たぞ！』

下降する思考をジャイルズの声が遮った。クレアは弱々しい声で返答し、自機を移動させる。二重扉の一層目が開いた。

『もう少しで帰れるんだ。生きて戻れよ！』

「……了解」

自分でも驚くほど覇気に欠ける声だった。必要とされてない戦いに行く意味などあるのだろうか？　どうせシルヴァが全滅させている。そんなことを考えながら、彼女は機体を宇宙に舞わせた。

◇◇◇◇◇

「ちっ……！」

暗い宇宙で＜ジン＞が回転する。そのすぐ近くを、敵の砲弾が切り裂いていった。見事な連携だ。シルヴァは舌を巻いた。＜キャットゥス＞は毎度の如く小回りが効かない上、＜パルデュス＞の弾数は六発しかなく、前回のように誤魔化すこともできない。

周囲を飛び回る＜メビウス＞に舌打ちする。いまいち集中できない。というのも指揮官機らしい＜メビウス・ゼロ＞に気をとられているからだ。あれは自分が危険だと思った相手ではない――――そうシルヴァは直感していた。

振り切りたいが、敵機を無視するわけにもいかない。＜ブーゲンビリア＞の対空砲は四門しかないのだ。クレアにナチュラルを殺させたくもない。

「くそっ……」

”アイツ”はどこだ？　気が逸る。集中を欠いた頭で＜キャットゥス＞が敵を捉えるわけもない。募る苛立ちを、シルヴァは必死で無視するよう努めた。

エノーラは＜メビウス・ゼロ＞の中で舌打ちした。モニターに映る＜ジン＞はこちらが放った砲弾をひらりと避ける。独特な機動。掴みどころがない。まるで雲のようだった。

展開した四基のガンバレルが敵を狙うがまたもいなされる。熟練し

たコーディネイターのパイロットでも回避することは困難なはずだ。それをあの＜ジン＞は軽々と射線を読み、砲弾の合間を縫うように動く。

こちらの攻撃はただの一度も敵機を捉えられない。反撃することも可能なはずなのに、＜ジン＞は持っているバズーカを撃つこともなく、脚部のミサイルポッドを使う気配もない。

相手にされていない――――エノーラの直感がそう告げた。敵の心情がおぼろげながらわかる。こんな感覚は初めてだった。戦闘中、自分の第六感がどんどんと研ぎ澄まされていく。ガンバレルの機動は普段と比べ、遥かに繊細かつ強靭に感じる。

自分が強くなっていく。エノーラは確信した。出撃前よりも今のほうが操縦技術は上になっている自覚があった。だからこそ、あの＜ジン＞は気に食わない。

こんなにも強くなった自分の攻撃を避けるのだ。腹が立った。機体、ガンバレル双方の残弾も少ない。早急に決着をつけなければ。混乱と苛立ちの中、エノーラはそう判断した。

ガンバレルを再度展開、僚機に指示を出す。絶妙な連携で瞬く間に＜ジン＞を囲んだ。狙いを定める。ありったけの砲弾を食らわせてやる――――そう思った矢先、ガンバレルの一基が破壊された。

「なっ……！」

純白の機体。＜シグー＞だ。ライフルを構え、突撃してくる。増援……エノーラがそれを理解するまで、少しの時間を要した。その間に＜ジン＞は反撃を開始する。

弾かれたように動き、一機の＜メビウス＞の後ろに付く。脚部から三発の短距離誘導ミサイルが発射された。狙われている味方のパイロットの声が、開きっ放しの回線から聞こえる。

悪態が悲鳴に変わり、その＜メビウス＞は５００ｍｍ砲弾の餌食となった。そこでようやくエノーラは我に返る。一機が撃墜された。もう一機も＜シグー＞の攻撃を受けている。このままでは遠くない内に敗北するだろう。

（なんなんだこれは……？）

そう思わずにはいられなかった。腕前が上がった。そのはずなのにうまくいかない。意味がわからない。混乱から立ち直るため、彼女はそれを怒りに変えた。あの忌々しい＜ジン＞も＜シグー＞も墜としてやる。

そう誓い、三基になったガンバレルを展開した。

弱々しい気概のまま、クレアは＜シグー＞を進ませていた。モニターに光が映る。青白い、尾を引く光。戦いのものだろう。

その中心にシルヴァの＜ジン＞がいる。敵機に囲まれているが被弾した様子もなく、動きに危なげもない。敵のＭＡも良い連携を見せている。パイロットは間違いなく熟練者だ。

戦場ではやられ役の印象が強い＜メビウス＞だが、うまく使えばＭＳとも互角に渡りあえる。

「……」

シルヴァは反撃するでもなく逃げ回っている。敵に集中していないのだ。他のものに気をとられているように感じられる。クレアはどうしようもない脱力感に襲われた。あれだけの攻撃を受けながら、片手間でいなせるのだ。

明らかに前の戦いより強くなっている。抗いようのない力の差があるのだ。自分はナチュラルで、彼はコーディネイター。大した努力もなく、こうやってみるみる強くなっていく。

「……」

自分はどうだ？　部下が戦場の真っ只中にいるのに、その後ろでただ見ているだけ。手を貸すわけでもなく、なにか策を練るわけでもない。

（私は一体、なんのために……）

自分もあそこに行かなければ。そう思うのに、操縦桿を握る手に力が入らない。惨めだった。どうしようもなく惨めだった。

そんな彼女の目に、瞬く光が映る。美しいと思った。その光に吸い寄せられるように、＜シグー＞は動き出す。クレアは閃いた。役に立てないなら、盾になればいい。簡単なことだ。

その思考が危険なことにも気が付かず、曇った頭のまま重突撃機銃を構える。狙いは動きまわるガンバレル。精密な射撃で撃ち落とした。

いきなり現れた＜シグー＞の攻撃で、敵は目に見えて混乱した。それに便乗する形でシルヴァの＜ジン＞も一機を墜とす。役に立った。それはわかったが、クレアは喜べもしなかった。

頭に靄がかかっているように思考がはっきりとしない。残った敵に重突撃機銃と盾のバルカンで牽制を繰り返す。自分の機体が足を止めていることに彼女は気が付かなかった。

隊長機らしい＜メビウス・ゼロ＞がガンバレルを展開。シルヴァを狙うも外れた。彼は＜キャットゥス＞を放り出し、重斬刀を抜く。まるでクレアの射線に被せるように動き、＜パルデュス＞とのコンボで＜メビウス＞を切り裂いた。

残るは一機。機械じみた手つきで＜シグー＞を動かし、＜メビウス・ゼロ＞がいた方を向く。しかし敵はいない。上だ。

『――――クレアっ！！』

静かだったコックピットにいきなりシルヴァの声が響く。初めて聞く彼の怒鳴りに、クレアは背筋を震わせた。同時に、ずっと頭にかかっていた靄が晴れる。

「あ……」

ここは何処か。自分は何をしているか。何をしようとしていたか。一瞬、何もわからなくなる。

『そこから離れろ！』

わけもわからず機体を操作しようとするが、反応しない。いや、何かが絡まって動けないのだ。モニターの映像を拡大。＜シグー＞の両腕部と右足にワイヤーのような物が絡み付いている。

ガンバレルの制御に使われるワイヤーに拘束されたのだ。警報が鳴り、正面から＜メビウス・ゼロ＞が迫ってくる。単装型リニアガンの砲口が光る。

「……！」

目を瞑ると同時にコックピットを激しい衝撃が襲う。死んだと思った。だが違う。敵の砲弾は＜シグー＞の左腕と左翼バーニアをもぎ取っただけだ。

疑問に思うクレアの近くにシルヴァの＜ジン＞がやって来た。右手に持った＜キャットゥス＞を連射している。彼の牽制のおかげで助かったのだと気付く。

「シルヴァ……」

＜ジン＞は敵が十分に離れたの見て、重斬刀でワイヤーを斬っていく。

『無事か？　損傷は？　船に戻れるか？』

矢継ぎ早に言ってくる。普段の彼からは想像も出来ないほど落ち着きの無い様子に、クレアは何故か深い安堵を覚えた。

彼も自分と同じ人間なのだ。恐怖も感じるし、心配だってする。ベンチに座って話をした時、それを確かに理解したはずなのに。

「ああ、なんともない。……敵が後ろにいるぞ」

何故か気恥ずかしくなり、＜ジン＞を押しのける。背部にマウントされていた重斬刀を取り出した。再び＜メビウス・ゼロ＞が向かってくる。

『おい……』

「うるさい！　黙って見ていろ。私は――――」

シルヴァの声を遮り機体を前へ。敵機から発射されたリニアガンの砲弾を軽やかに避ける。機体が軽い。そう感じながら、なめらかな手つきで操作。

「お前の上官だぞ！」

すれ違いざま、＜メビウス・ゼロ＞を引っ掻くように斬り付ける。機体の一部が爆発し、敵は去っていく。

「……」

息を吐く。同時に自分が何を考えていたのかようやく理解した。シルヴァに適わない？　ふざけるな。才能などくそくらえだ。コーディネイターの力なんて今まで嫌というほど見てきた。

それでもそれに抗うと決めたのだ。ナチュラルでありながらＭＳを扱える自分には、きっとなにか役目がある。きっと自分にしか出来ないことがあるはずだ。もしかしたらそれは、ナチュラルでありながらコーディネイターを理解出来るということかもしれない。

いつになく晴れ晴れとした気分でモニターを見る。長い間、身体にまとわりついていた不快感が消えていくような、そんな気分だ。

ヘルメットを取る。シルヴァに帰投命令を出そうと思い、＜ジン＞の方を向いた。その瞬間、

シルヴァ機が上を見た直後、閃光が走る。＜キャットゥス＞を持っていた右腕を破壊された。何が起きているか理解する間もなく、クレアの機体も衝撃に襲われる。頭を強打し、彼女は気を失った。

◇◇◇◇◇

部下達が戦う様子をヴィレッジは静かに眺めていた。＜メビウス・ゼロ＞一機に＜メビウス＞ニ機。そのパイロットはいずれも腕利き。にも関わらず、敵を仕留められずにいる。

「ふむ……」

ヴィレッジは呟く。彼がこうして見ているのは臆病風に吹かれたわけでも、敵に対して「面白い……」などとふざけたことを言うためでもない。

上から面倒を見ろと言われたエノーラと、威圧感を放つ謎の＜ジン＞の戦いをこの目で見るためでもあるし、単純な理由として、あの近距離でニ機がガンバレルをフルに使うとワイヤーが絡まって大変なことになることが挙げられる。

しばらく見ているうちに、あることに気付いた。エノーラの動きが

見違えて良くなっている。あの＜ジン＞のパイロットと共鳴しているのかもしれない。

反面、＜ジン＞の動きは精彩を欠いている。三機からの猛攻を軽々と躱しているが、攻撃する気配もない。姿を見せない最後の一機を探しているのだ。

しかしそんな機動でもベテランのパイロット達を相手に余裕がある。ヴィレッジは鼻を鳴らした。彼はコーディネイターがこの上なく嫌いだった。才能を金で買い、それをさも自分の物のように自慢する。滑稽極まりない。挙げ句にコロニーを占拠し、勝手に改造した挙げ句、独立したいなどと。挑発をする才能も調整（コーディネート）してもらったのだろうか。

モニターの中を動きまわる＜ジン＞を睨む。忌々しくてたまらない。

「テロリストめ……！」

＜メビウス・ゼロ＞を駆ってコーディネイターを次々と血祭りにあげた時は感動したものだった。金で買えない才能を、自分は持っているのだ。そしてそれを使えば奴らにだって勝てる。才能に溺れている分、柔軟性に欠けるため予想外の事態に弱い。こちらを下等な生物だと見下しているため、ろくな努力もしないし、不利になると泣き叫ぶ。

そんな敵を殺す時に得られる途方もない快感。ヴィレッジはそれが好きでたまらなかった。だからこそあの時――――

暗い思いにふけっていると敵の増援が現れた。細く力強い、白銀の

体躯。<シグー>だ。指揮官などに配備される機体なため、戦場で見かけることは稀である。普段なら舌なめずりをするところだが、どうにも敵機の動きがおかしい。

覇気が無いのだ。動きは緩慢で、戦場を前にしてノロノロと進んでいる。射撃の腕は悪くないのか、エノーラ機のガンバレルを撃ち落とした。これをきっかけに三機の連携が崩れる。

いきなりの増援。それも<シグー>である。乗っているパイロットはエースだと思うのが普通だ。回線を開いてなくても動揺が伝わってくる。

<ジン>が動き、一機を撃墜。さらに続けてもう一機を墜とす。エノーラといえば、動かない<シグー>に攻撃しようとしている。

ガンバレルの弾が切れたらしく敵機を拘束するが、寸前のところで逃げられる。そこでヴィレッジはエノーラに撤退命令を出した。勝ち目は薄い。彼女を失うわけにもいかなかった。

しかし拒否し、また突撃していく。<ジン>にやられるかと思いきや、<シグー>が動いた。重斬刀の一撃を受け、エノーラは渋々退いていく。

ヴィレッジは機体を動かした。このままで帰るつもりはない。マニュアルで照準を定め、トリガーを引く。リニアガンから発射された砲弾が<ジン>の右腕を破壊する。続いてもう一撃。<シグー>にも当たり、ウイングバインダーをもぎ取った。

「ふん……」

＜ジン＞は攻撃される直前に気付いたらしく、僅かに身を逸らした。動けなくなった＜シグー＞を庇うように立ち、浮かんでいた＜キャットゥス＞を掴む。

ヴィレッジはその様子を、凍てつくような目で睨んだ。

シルヴァは顔をしかめる。視線の先には＜メビウス・ゼロ＞がいた。先ほどの相手とは比較にならないほどの威圧感を放っている。

強い。パイロットとしての勘が告げている。一つ一つの動きが洗練され、芸術的にさえ思える。まずい。

最悪の事態を想定し、クレアに呼び掛けるが反応がない。気絶したのか、それとも――――

「――――！」

悪寒が走る。咄嗟に機体を動かした。ガンバレルから撃ちだされた砲弾が通りすぎていく。＜キャットゥス＞を向けるが撃つ暇もなく主の元へ帰っていった。

（くそ……！）

集中できない。いつもの調子が出ない。シルヴァの中に今までなかった焦りが生まれる。頭の隅で、何かが引っ掛かっていた。目の前の敵が発してくる感覚。敵意、殺意、憎悪。

知っているような気がする。どこかで会ったことがあるのか。どうすればいい？

リニアガンを撃った敵機が脇を通りすぎる。反転し、またこちらに向かってきた。四基のガンバレルを展開、蕾が開花する瞬間を思わせる。そんな美しい動作にも、殺意が籠もっていた。

（なんだ……）

一斉掃射を浴び、機体の左足、ウイングバインダーの一部が被弾した。モニターの映像が崩れ、アラームが鳴り響く。

（なにが……）

おもむろに機体を動かし、＜キャットゥス＞を撃つ。かすりもせずに外れた。リニアガンの砲弾が脇腹に命中し、モニターの一部が脱落した。その衝撃で千切れかけていた左脚部が取れる。

浮かぶ破片。それを見て、閃いた。回線を開く。

「お前……！　あの時、ユニウスセブンにいたな！」

◇◇◇◇◇

弱い。そう思った。あの＜ジン＞のパイロットからは殺気を感じない。感じるのは戸惑いだけだ。自分に死が近づいているのに恐怖もなく、なにかを探している。その姿勢は先ほどから変わらない。

そんな時、いきなりオープン回線から声が響いた。年端もいかぬ少年の声だった。

あの時

ユニウスセブン

この二つのキーワードだけで、ヴィレッジは全てを理解した。その顔に笑みが浮かぶ。

”血のバレンタイン”。開戦直後にあった、コーディネイターの中に恐怖を植え付けた事件だ。地球連合の戦艦。その一隻から発進した、＜メビウス＞一機。

それから発射された一発の核ミサイルがコロニーの一つ、ユニウスセブンに直撃。ニ四万もの犠牲者を生んだ。光の中に命が溶けていく――そんな美しくもおぞましい光景を、ヴィレッジは特等席から見ていた。＜メビウス＞のコックピットの中で。

引き金を引いたの他でもない、ヴィレッジ自身なのだ。その光景を眺めながら、彼は笑った。取り返しのつかないことをした罪の意識よりも、特別な存在となった高揚感で満たされていたのだ。

才能を金で買い、愚かにも増長したコーディネイター達。ヴィレッジからしてみれば鉄槌としか思えなかった。

「そうだ！　私だよ！　ユニウスセブンに光の矢を打ち込んだのは！」

相手に向かって言う。声は僅かに震えていた。ひた隠しにしてきた偉業を、目の前の少年だけが知っている。これは凄まじいことだ。

『人が死んだ！　何万人もの人が！』

「そうさ！　だが宇宙に浮かんだ砂時計など邪魔なだけだろう！

あんな物が頭の上にあっては対等な戦争なんて出来んさ！」

ガンバレルを展開。四方から攻撃を加える。しかし<ジン>は異常なほど素早い動作で躱した。

『なんでそんなことが出来る！？　貴様だって人だろうに！』

「バイオテロをするような連中が、同じ人だと思えんなぁ！」

Ｓ２型インフルエンザ。ナチュラルの致死率は１００％。ヴィレッジの家族もそれの餌食になった。嫌いだった父も、優しい母も、可愛い妹も。未知の病に弱いはずのコーディネイターは被害者０。おかしいとしか思えない。

「あんなウィルスを撒いて独立など笑わせる！　テロリストのザフトがっ！」

『俺はザフトじゃない！』

鋭い声が返ってくる。ヴィレッジは眉を寄せた。ニ機は交錯し、それぞれ撃ち合う。

「なら何故ここに！」

『貴様が呼んだんだろう！』

目の前にいる少年から感じる不可解な感触。導かれるようにして出会った。

「なら宿命か！」

『お前みたいな奴と！』

◇◇◇◇◇

飛び回るガンバレル。位置こそ分かるものの、攻撃を当てられない。＜キャットゥス＞では遅すぎる。シルヴァは苛ついていた。自分と似たような力を持つ者が生んだ惨劇。こちらは地獄を見たのにあちらは楽しんでいる。

わかりあえる。理由もなくそう思っていたのだ。十年前に出会った少年とは仲良くなれた。なら誰とだってきっと――――

しかしそんな願望は打ち砕かれた。目の前の敵は、＜メビウス・ゼロ＞のパイロットは嘲笑っている。人の死を見て、馬鹿にしている。

許せるわけもなかった。正義感などではない。受けた痛みに対する報復だった。必死で機体を動かす。だが付いてきてくれない。今まで戦ってきた＜ジン＞の反応は、まるで戦いを拒否するかの如く鈍い。

（間違ってるのか……？）

ふとそう思う。身体を包む機体が、自分を咎めているような気がする。それは迷いになり、迷いは機体の動きを鈍らせた。

頭に電流が走る。気付いた時には遅く、敵の攻撃が迫っていた。咄嗟に＜キャットゥス＞を盾にする。今まで愛用してきた無反動砲は

木っ端微塵になった。

感じたこともなかった兵器への愛着が、失った事実と共に押し寄せてくる。それを振り切るように、重斬刀を引き抜いた。

爆風がはれると同時に敵の機影を捉える。直撃コース。超人的な操縦技術で機体を操り、重斬刀を投擲した。ブーメランのように回転しながら飛んでいく。

突き刺さるかに思えたが、一基のガンバレルが盾になる。再び爆発が起こった。その中から＜メビウス・ゼロ＞が飛び出してくる。こちらに向いている砲口を見て、シルヴァは死を覚悟した。しかしコックピットを向いていた砲口は上にずれ、＜ジン＞の頭部を吹き飛ばす。仕留められたはずなのに。凍り付いたシルヴァの耳に、嘲笑的な声が聞こえた。

『私の名前はヴィレッジ・プレオベール。君の……同類だ』

＜メビウス・ゼロ＞はそのまま過ぎ去っていく。シルヴァは無力感にうちひしがれたまま、それを見送ることしか出来なかった。

◇◇◇◇◇

＜メビウス・ゼロ＞のコックピットでヴィレッジはヘルメットを脱いだ。顔には笑みが浮かんでいる。かつてない高揚感。とても抑えられそうにない。

あの少年。また会えるだろうか？　自分の偉業を知るコーディネイターなど、こんなところで殺せるはずもなかった。それにはまだ戦火が小さすぎる。この最低な戦争はこれからもっと、もっと大きく

育つだろう。

そして嬉しいことに、この戦いで自分の力はさらに強くなった。戦争はまだ続き、自分はまだまだ強くなれる。明るい未来が見えるようだ。

楽しくて仕方がない。これが神の思し召しなら、一生分の感謝を捧げたい。

好敵手をやっと見つけたのだ。

◇◇◇◇◇

負けた。

暗い＜ジン＞のコックピット。シルヴァはヘルメットを外した。手が震える。今まで感じたことのなかった恐怖と緊張が、ここにきて一気に襲ってくる。

ヘルメットのバイザーに映った自分の顔は初めて見るものだった。額は汗だくで、口端からは血が出ている。これまで押し込めていたものが溢れだしている。虚ろな表情で呟いた。

「これが戦場か……」

”死”が身近にあるのだ。血のバレンタインでも感じたが、それは地球から離れた宙域でのこと。大きさは別として、近い場所で鮮明に感じるのとは少し違う。

目を閉じる。人の魂がすぐ近くにあるのを感じる。シルヴァ自身が

奪ったものだ。

――――人殺し。

耳元でそう囁かれた気がした。いつもなら怯えるところだが、今は疲れ切っている。黙っていろ。そう思った。

なんにせよもう任務は終わったのだ。三度も敵を退けて＜ブーゲンビリア＞を守った。初陣から＜ジン＞を二機も墜とし、二度目の戦いではエースと思われる奴にも勝った。恐らく凄いことなのだろう。皆が褒めてくれた。

だが……

身体を支配する無力感。これはなんだ？　他人のことなど気に掛けないと誓った筈なのに、今は無性にあの＜メビウス・ゼロ＞のパイロットに勝ちたいと思った。あの男に恐怖を与えたい。命を弄ばれる側の恐怖を植え付けてやりたい。

そう強く思う。それは危険な思考であったが、シルヴァは気にしなかった。

「ヴィレッジ・プレオベール……」

宇宙を漂う＜ジン＞の中で、初めて勝ちたいと思った男の名前を呼ぶ。

普通の日常には戻れそうになかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2906z/

屑鉄機械劇場

2012年1月6日17時54分発行